

1986

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十五年五月一日發行(每月一回一日發行)

永樂町人 編輯



五月號

【號七十八第】



三中井の

洋服部新設

艶麗な花の好季に會しまして

奇聲を擧げた三中井の洋服部

花から—實へ

心膽を込めました顧客本位、誠實主義

洋服の御相談には三中井を御利用下さい

そして—此の幼な兒が—のんびり

育つて行けるやう御配慮の程願上ます

産みの母、育ての親

との關係に於きまして、永遠に何かと

洋服の御相談が乞はれたく存じます

御新調の御方は

先づ 三中井へ



圖案
ポスター
ホロー看板
ペンキ看板
彫刻看板
ハツク
ア
チ

御需めに應じ

迅速且つ丁寧

高級美術的に

看板圖案ポスター

その他勉強可仕

御用命願ひ上候

早川堂看板製作所

京城市黄金町遊園内

電話本局二四七六番

早川堂地方部新設

京城南大門通鮮銀前

頭の先より足の先まで

と云ふ趣意にて洋装に必要な附属雑貨部を開設致しました、實用向から高麗品迄メット取揃へ、確かな品を極めて薄利で御提供申します、何卒「丁子屋の洋服」同様御評判の程御願申上げます。

▲雑貨部品目

帽子、ワイシャツ、カラー、ネクタイ、ボタン類
メリヤス、セーター、沓下、手袋、首巻、ズボン
ツリ、ハンカチーフ、小供セーター、下着類

毛布新着

有名なロシア毛布各種、旅行用として最も妙
日本毛織特製茶毛布各種、寢費用として必需品

京城南大門通り

丁子屋洋服店

電話本局

三六四二番
七九二二番
二〇九〇番

休日無し毎日夜九時迄営業

御用の節は店内雑貨部御呼出被下度

市内は御一報次第現品持参貴覽に供し申候



官製食卓鹽

電機諸機械

コンチットチューブ

ラヂオ

京城南大門通三丁目

富田商會

長電本三三〇九

幣店への御用は
願上へ御下命す

秀蘭遺稿

秀蘭女史安田靖子さんの遺稿
女史は女流教育家であり同時に
一代の思想家文章家であり
ました。
八百餘頁の遺稿成る、特志家
の御一讀を望む。

一部 定價金 五圓

お取次 京城雜筆社

南山莊

市内西四軒町

電話本局 一五八五番

五月號目次

(原稿は大體到
著順に由る)

「時を送るの辭」.....	殖産銀行	矢鍋永三郎氏
スナフブ、シヨット.....	総督府	萩原彦三氏
歸京雜筆.....	朝鮮商工會社	川添種一郎氏
人事の轉變.....	殖産銀行	高久敏男氏
へそ禮讚.....	京城婦人病院	工藤武城氏
隨筆の味.....	大阪朝日新聞社	下村海南氏
北漢山探勝の記.....	鐘路警察署	森六治氏
ロシヤ遊記.....	鐵道局	佐藤作郎氏
金剛山と植物.....	東洋畫家	加藤松林氏
藥研に凭れて.....	今本醫院	今本義胤氏
雲仙遊記.....	京城日新聞社	別府八百吉氏
ブル公(再び).....	久原京城事務所	小瀧元司氏
新しい俳句.....	遞信局	津田常男氏
對局秘訣.....	東京將棋八段	金易次郎氏
端午雞唱.....	大阪朝日支局	井上收郎氏
櫻花日誌.....	殖銀東京支店	中島司氏
榮食一年.....	酒井婦人病院	酒井一郎氏
刑事被告人と なりし思ひ出.....	辯護士	山口均四郎氏
架空發刊.....	朝鮮ホテル	伊藤龍作氏
故郷.....	辯護士	中島長作氏
五月の夢.....	日蕃京城支店	藤田積久氏
君子山の麓まで.....	仁川	吉岡久氏
内地をめぐる.....	鮮滿開拓會社	飯泉幹太郎氏
予が秘藏の碁石.....	赤十字朝鮮本部	橋本豊太郎氏
書.....	京城電氣會社	佐々木正太郎氏
洋傘直しと英雄.....	鐵道局	見目得太郎氏
妓生と小林君.....	渡邊病院	鉦鹿曉太郎氏
眞の雜筆.....	朝鮮鑛業會	渡邊晋氏
秀蘭遺稿.....	東拓京城支店	徳野眞士氏
夢.....	松本光氏
むだがり.....	今村氏
猩紅熱.....	朝鮮佛教社	中村健太郎氏
青山谷中に詣で.....	辯護士	高橋章之助氏
越中禪.....	廣江澤次郎氏
一句一字不可加減.....	西本願寺	清谷惠眼氏

『時』を送る辭

矢鍋永三郎

彼を吾等の仲間では『時』と呼ぶ、オイ『時』と呼びかけるのを慣はしとしてゐる、『時』の十五歳頃の寫眞がある、天頂と肩とは麗はしく眼も溫雅であるが鼻は少し天上を仰向ひて居る、瘦せた小柄の體格である、學校の體格検査では常に營養不良と認められ丙の體格とせられた、併し爾來三十年無比の健康體である、彼の二十三歳頃の寫眞を見ると大學の制帽と制服を着けて立派な髻を生やして居る、今でも記憶して居るが其の制服は彼のものではなかつた、借着であつた、近頃脱いだ官服も彼自身のものではなかつたかも知れぬ、其頃彼は禪寺に通つて參禪してゐたが一言半句も友人に向つて禪を談らなかつた、今や世人は彼の圓轉滑脱に舌を巻く、最近の彼は酒量に於て友人を凌ぐの元氣を有してゐる、一夜にして官途を辭し多難の聞へある市長に就職することを快諾したる勇斷も彼の此の元氣と天成の健康とに因ることと思ふ、安易の地を去つて將來の風雲を望む彼の志を壯とする、白馬を買つて靈感を享けたる彼の敏感を偉とする、花柳界では『時さん、時さん』と彼の去つた今日でも盛に話の種となつてゐる、吾等の『時』とは別の天地ではあるが同じく人氣男である、九州の天地に於ても人氣男で通るであらう、吾等はオイ『時』と彼を呼ぶ機會の少くなつた事を淋しく思ふ、此誌最大の寄稿者である彼を送るの辭を此誌上に載せて頂く事を無上の光榮とする。

スナツプ・シヨツト

萩原彦三

○ 汽車は林の中をひた走りに走つて、消え残る雪の中に白樺の林がすく／＼と立つ谷合ひのとある小驛に汽車はとまつた。降りる者も乗る者もない。プラットホームのベンチに、赤い毛糸の帽子を着た若き露人の母が幼児と共に、早春の暖い日差しを浴びて遊んでゐるのみである。森の中の閑寂そのまゝの光景である。丘上の家はみな歐羅めきてしつらへてある。バルコンに置き忘れた椅子のさま、

○ 煙突からのぼる薄煙りのさまなどロシアの田舎の農家を思はずには居られない、中には草葺の家もある。やがて驛員の打鳴らす鐘の音を合圖に汽車は再び森の中へと走つて行つた。

○ 歐羅から一週一度の急行列車が着くと、恐らく居留民の全部が集まつたのではないかと思ふ程、いろ／＼な階級の人々が澤山集まつて来て、停車場の欄に凭つて汽車を迎へる。赤や白の毛糸の帽子を着た少女の群れもあれば、學校の制帽を被つた少年達もある。可愛らしい子供を抱いた若き母もあれば、見すばらしい手布を肩にかけた老婆もある。其の他厚い毛皮の外套にくるまつた紳士、元氣そうな若者、氣力の衰へたやうな労働者など、さまざまの人々が皆一線

に、あくがれ心をもつて都のたとり聞かまほしく汽車から降りる客を迎へたり、或は都からの旅行者の群れを眺めたりして居る。その光景は如何にも配流の人々のさびしさを思はしめずにはをかないものであつた。

○ 旗を竿頭高くひるがへす三江口の停車場。銃を擔つて拱手する巡警。青柴一束を臺秤にかけてゐる驛員。列車の到着をも知らずに快げに居眠る乗務巡警。

○ 四洸線の三林、太平川、開通など新しき町なれど穀物の搬出極めて多く、立派な市街を成せるを見る。大豆高粮などの麻袋を、夥しく野積にせるさま壯觀なり。唯下敷などとはなく、雪どけにて泥濘なる地上に平然と積み重ねたるさすがに大國の人々の神経を察すべく、同行の邦商しきりに俵數をかぞへて其の損害を計算しつゝあるを見て、我が邦人の他人の痾氣を氣にやむ苦勞性を察すべし。

○ 騎兵數十騎、朝風に旗なびかしつつ曠原を疾驅しつゝあるを見る。唐詩にある胡馬朔風にいななくとはこんな光景なるべし。主なき馬をのれたるは換へ馬か戦利品か、はた又戦に傷きたる戦友の馬か。

○ 朝風寒き朝、臥虎屯と云ふ小驛に汽車が着くと、降りる客も殆ど無いが、小さき蒙古馬をつないで客を待つ馬子三四塞そうに立つ。土塀をめぐるした民家二三、屋根も平に低き泥土にてあはれげなり窓を排して汽車を顧る女の姿も見ゆ、例の紺色の著物なれども、さすがに髪には赤いものをつけたり手絲の襟巻をせる小供も見ゆるはさすが沿線だけに文明の風も吹くなるべし。

○ 長春に着いたとき、停車場に露西亞少女の子守二人どてらを着、下駄を穿つて遊んでゐるのがあつた。紅毛碧眼の日本服も案外可愛らしいと思つた。公園の廣場で數名の露西亞少年が竹ぎれを腰に挿み劍闘のまね事をしてゐた。子供は何處でもこんな勇ましい遊びが好きなのかしら。唯其の身なりの見すばらしいのが、漂泊の身の上を思はせて可哀そうであつた。

○ 旅大道路をドライブする。海に沿ふタアルマカダム道路のすべりの快さ。いろ／＼な牛車に逢ふ。デブシーの車のやうな大きな覆を附けたものもある。乗つてゐる若い女どもは、優儀の類やら、顔を赤く塗つて髪にはいろ／＼な飾りを挿し、盛装してゐる。平安朝の御所車のやうな格好の、眞赤な帷を垂れてゐるものもある。帷深くして見えないが、若ひ美しい花嫁でも乗つてゐるのであらう。男どもが大勢無蓋の牛車に乗つて笛を吹いたり、鐘を鳴らしたりやつて來るものもあつた。長閑な春畫をのたり／＼と牛車を軋らせるのも亦風流な事であらう。

歸京雜筆

川添種一郎

〔四〕
けに用心が欲しかったと何とも惜しまれて居る。人事に非ず國士ならざる自分達も自省せねばならぬ何時か醫師が忠告せし如く五十才以上の人は無理してはならぬ。それには四十才頃から保健準備を必要とすと。

財界好轉期來乎

正月五日片腕に引當て居た義弟の訃音に接し、六日出發東京へ直行した。往復切符の期限間際の三月一日やつと歸南して又々平壤京城に引返し更に平南間の往復數回三月の月半過ぎた今日此頃突然阪神地方よりの召電に接す。たつきとは云ひ乍ら如何にも煩はしい。此六十日間の旅、京阪數回の往復其の間の隨感を茲雜筆に走らせて名記者の都落ちに落魄せる社友に同情し慰撫するつもり、且つは眞埋めのつもりなり。

子弟教育

私共子供時代には世間の親達は子弟の學費を準備する事が唯一の苦勞であるかの様に夢見て居た。茲二三年來になつて親御の心配は一つ増した。折角苦心して子弟が高等の教育を受け卒業して各々に會談して見ると赤化ならざるも思想上得心出來ぬ溝渠が出來てゐたりして驚愕させられる。教育資金思想の安定等に無難なりしものも數年前の最高學府専門學校の増設に結果する本年度の就職難に對する憂慮は著しいものであつた。數年後には此反動が社會に表現されるであらう。爲政家保護者及子弟共に大に痛感したのであらう!! 又今後するであらう。

東京交通整理

震災當時の交通上の亂雜が交通整理を必要ならしめ尙社會道徳秩序が回復せず否思想上の悪化が益々整理の効果を薄めた。復興形態が進捗すればする程交通機關が複雑になり整理が困難になつた。十數年前の倫敦交通整理は行届いてゐたが夫れでも東京から行つた自分等も暫らくは面喰らつた。往々神經衰弱の因を作つた人もあつたと謂ふ。現在の東京は夫れ以上と感ぜられた。交通上のエヂケーシヨシに、服裝に、自覺に、得た整理に改善を要す。

保健上の無理

老齡といふべき三浦將軍は兎もあれ加藤首相大木伯の如き年壽に於てあきらめかねる知名先輩の士が亡くなられた。天壽と彼是愚痴る譯に非るも仄かに近況を傳聞するに保健上の無理があつた様である。私の知れる範圍では加藤伯も相當立派な體軀の所有者であつた。近年持病もあつたとの事なるも少くとも強健ならざるまでも老婆と云ふでなく虚弱者と云ふに非ず而も疲勞風氣を無理に押通された。大木伯も見かけ通り立派な體質であつた。然し平素肥滿を注意される必要はあつたが別府に靜養され居る時から少しく豫感があつた。國士として重きを置かるゝ丈

議會で首相藏相は財界好轉曙光來をほのめかされた。銀行方面の財界通も似通ひの論説を新聞紙上に載せられた事もあつた。爲替の復舊貿易數字の増大、然し自分には能く呑み込め得なかつた。個人々々の名土の高見を二三伺ふ機會もあつたが何とも論斷を躊躇されてゐた。爲替の復舊をこぼす人々も大分あつた、貿易數字は一時的現象に終りはせぬか。萬人を肯んぜしむる論理的斷案を下してくれ人を見出せなかつた。
東京大阪方面の實狀は淋しく、不景氣をかこつ人々が多かつた。藏相一人憂慮されて居る様に又もがいて居られる様に感じた。自重反省の時に非る乎。

◆自樂莊から

中島 司

『雜筆』を手にするのが何より樂みです。讀んで居りますとまづたく京城に居る心地になります。いろ／＼の先輩が京城を去られるのは困りますね。そんなに去る人が多いなら私は又歸つて行きませうかね。精々勉強して書き送ります。但しツマライナイといふことは豫め御承知おき下さい。花にはまだ二週間のひまがあります。(三三) 月十七日朝)

人事の轉變

高久敏男

過ぐる日曜日、書齋で机の抽出を整理して居ると、一枚の古寫眞が出て來た。明治四十四年の夏、會議で入城した鮮銀の支店長と本店幹部行員とが休日を利用して水原に遊び、正宗王が百二十餘年前の遺業たる華城を訪れ、蒼龍門内の東將台で記念のため撮影したものである。寫つて居る支店長十四名、本店幹部行員十三名合せて二十七名を數へる。余は當時同行下級行員の一人であつたが少しく華城の事跡に就て調べて居た故を以て東道の役を承り一行に加つて居た。十有五年を過ぎた今日眞に好個の思出である。これを手にして暫し追憶を藝することが出来なかつた。

想は自然諸氏が現況に及んで來る。當時朝鮮の金鑛界を双肩に荷ふて居た此人達は今何處にどうして居るであらうか。一人一人余が知れる範圍の近況を記憶より呼び起して見ると驚くべし此の一枚の寫眞が廣き社會に於ける人事の轉變を物語る縮圖であることを發見する。而して屬々として分秒を刻み流水の如く知らぬ間に過ぎて行く時なるものゝ人事を支配する力の偉大なるを今更ながら嘆せざるを得ない。

當時何れも壯顔に發瀾たる元氣を横溢させ假初にも人生の無常に心を惱めて居た者は一人も無かつた。

たであらふ。然るに此二十七名の内既に鬼籍に入つて居る者五名を數へる、而かも其二名迄は疊の上の死方ではなかつたとは何たる因縁であつたらうか。

故人となれる五名を除き、残る二十二名の内に今尙鮮銀に在職する者幾人であらうか。或は課長或は支店長、其數に於ては時に増減があつたけれども其椅子は今尙依然として存在して居るのは言ふまでもない。唯之を占むる今年の主は必ずしも昨年の主ではない。折々の機會に行はれた新陳代謝に當年の幹部は殆んど一掃し盡されて僅に一名を止むるのみとなつて居る。

朝鮮に職を求むる者必ずしも骨を朝鮮に埋むる者ではない。況や俸給に衣食し一枚の辭令に生活の本據を床の掛物の如く取替へられる浮草の生活を送る身が永く一地に淹留することの出来ないのは敢て不思議ではないが、二十二名の内に於て現に朝鮮に居を定めて居るもの二名だけとは心細い次第である。

唯茲に大に入意を強ふる一事がある。當時既に局長、課長若くは支店長として占めたる社會的地位は假令今は住居を移し職業を轉じても之を失墜せしめた者は殆んど無いのみならず、其多數は却て其地位を向上發展させて居る事實

がある。退て他の銀行、會社に轉じて之が重役の地位を占めた者が十二名ある。其他郷里に隱退して餘生を樂んで居るものは別として或は金融界に、或は事業界に夫々軍要なる一員として活動しつつある。

改めて故人となれる先輩五名の冥福を祈り、残る二十二名の將來を祝福して寫眞は又た抽出に納めた。

◆世間ばなし

平田久雄

京城連溪界の名物男といふと、例の松原徹州老であらう。赤いシヤツを着、何處でもノコノコ歩いてゐる。妙な狂詩や狂歌を作るので有名。

一方の人物として、立てられてゐるのが野田源吾氏(南大門外)これは人物も確かりしてゐ、仲々議論の立つ人である。

○ この野田さん字がうまい。どうかすると看板など持込れて、一筆揮はされると。二三日すると、もう忘れてゐるところへ、菓子折などが飛び込んで『先日はどうも……』とお禮をいはれるので、野田さんアツと面喰ひ『田舎廻りの書家待遇はどうぞ勘辨して下さい』

○ 佐藤千尋氏などを中心に、短歌雑誌『ポトナム』がある。主として在鮮歌人の作を集めてゐる。これまで會員のみに頒布したが、四月からは世間的にうり出してゐる品のいゝものである。

へそ禮讚

工藤武城

臍を練れば國富み、臍を固むれば兵強し。

喜べば氣輕に宿を替へ。怒れば憤然として筋斗を蹴へす。哀しめば惆悵として之を噬み、樂しめば絶れに絶れて天下を春にす。

大にしては、邦家の經濟に關與し、國防の根帶を把握し、小にしては、男女情緒の機微に參し、老若意志の表現に携さばる。

神が美人の中腹に和々たる臍を省略し、蒙傑の丹田より皿大の臍を奪ひたりとせよ人世は蕭條として如何に寂寞たるべき？、想像するだに戰慄を禁ずる能はず。神よ、榮光あれ！

旋渦して陥没すれば、蒸餾として鷹の親玉の如く、油然として渾々愛嬌湧く。

突兀として雲に聳ゆれば、牝鷄鳴を告げ、牛を賣損へども、造次にも飄飄の天職を忘却せず。

宜なり、賢明なる吾人の祖先が、臍を禮讚して、命帶と尊び、神嗣と敬ひ、命門と崇めし事や。

温厚なる朱熹も、此を形容して、輪毅の如く、礎の如く、又不動塵の如しと頌し左傳莊六年の章には噬臍を説きて、人世の行路を戒しむ。

雷公が其好下物の首位に臍を選擇せるは、其深慮のある所、誠に感服せざるを得ず人體の中央に晏如とし長養扶坐せる此君子に保會又は倍會と命名せるは、實に其龍眼の凡ならざるを覺ゆ。

何すれぞ其音調の屈托なくして飄逸なる。一たび此を唱ふれば、直ちに煦々として陽光浮び、言下に春堤芳草の萌ゆるの懽あり。

鮮語の明音、及び明子句、亦た怡然たる響あり。

羅の Umbilicus 英の Navel 佛の Nombriil 獨の Nabel 露の Pupok 伊の Umbelico 西の Koeldeoek 西の Omhigo 何れも嚶々たる快音の裡に、多分の滑稽調の含まれたるを見る。

粉料と軋轢に終始するを嘉例とせる國際會議には、商賈人の外交官を廢して、臍君をして此に代らしめよ。少くとも胸襟を開く事を更に徹底して、身に一絲を懸けず、堂々臍を露出して議せしめよ。

時に沸々として蟹眼を睨らし、魚眼を舞はず事ありとも、遂には必らず茶を沸かすの期あるや必せり。

嗚呼、へそよ、吾は爾を愛す。

隨筆の味

— 京城雜筆の讀後感 —

法學博士 下村海南

……君

京城雜筆面白く拜見しました。

君はじめ、今村、守屋、石森其他知己諸君の、筆のあとを見て、ことになづかしく感じました。

かうした上下をぬいだ、肩のこらぬ、隨筆には、心からのなごみがあつて正面から八釜しく、強調するよりも、眞の内鮮融和などは却てこの邊に特殊がありはせぬかと思ひます。

◇

ところで、その中に「路上の出來事」と題した記事がありました。「コン著生パーセキ」思ひ切り、重荷を負ふてる者を、つき飛すやうな心持では、到底大和民族の、大はなせぬと思ひます。

その筆者は、試みに「ヨボ君御免」といふたら、申様のない有難い表情を、浮べたとあります。僕はよく支那人は、何がいやだといへば、チャンと言はれることだ。鮮人は何がツライといへば、ヨボと云はれる事だと聞いてゐるが、もし鮮人に對するヨボの感じが、支那人に對するチャンと、相似たりとすれば、ヨボ君といふことすらも、どうかと氣がさします。春のやうな、ほがらかな、のどかな氣分の漂ふてる、京城雜筆の

中に、なるほどこれでは鮮人が、奮慨するものも、無理はない、と思はせるような記事が、宜い心持で記されてゐるのは、何んだか情ないような感じをします。

君の遠慮ない意見を聞かして下さい。

この雜誌は、矢張り文藝春秋型の方が、携帯に便であり、又目錄も表紙にかゝけて置くが、よくないですか。……

X X X

右の一文は、大阪朝日新聞社の専務である、海南下村博士が、四月號の京城雜筆を讀まれて、その讀後感……といふよりも、朝鮮民族への、心からなるプロオコリアンとしての流露を、私へ寄せられた私信の一節で、これをこの誌上で發表してよいか、悪いかも確かめないで、いはゞ全く私の獨斷でこゝに紹介するのです。

その一つの理由は、博士の意見が、私が京城に着任以來、考へて居る、眞のプロオコリアンの心持と合致すること、その二つは、ながらく台灣總務長官であつた博士が、そのよく朝鮮民族と似通つた、支那人……台灣人の、國境を撤した、心の味方であること、その三つは、この問題が、この京

城雜誌上で發見された……といふよりも、共鳴された、といふ三個であつて、今秋あたりは、必ず渡鮮される博士の、朝鮮民族への心持乃至は朝鮮問題への考察の一片とを紹介して置きたい事と、この雜誌の寄稿者には、博士の知己も相當多いと思ふからであります。

◇

君は一體、ヨボとかヨボ君とかいふ問題を、どう思ふか、と内地の人から、殊に私の飯櫃の本案から、開き直つて返事をしろ、とお面を一本食はされると、まつてましたと、こちらも坐り直したいが朝鮮に居る多くの日本人は、ヨボの語義を心得ないものが、ザラにある。

そしてこれを、朝鮮人の代名詞と心得て居るからやり切れない。私は私の新聞でも、その他の雜誌や、講演などでも説くやうに、今日の朝鮮問題や、内鮮融和は、もう理屈じゃない、心の問題であり人間と人間の感じだ、といふのも博士のいはれる、かみしもをぬいだ、心からのなごみの間にこそ、眞の融和が行はれるのであらう。

◇

この博士の私信の返事は、私の私信として別に書く、けれども、この雜筆に因みのある、條項だけを紹介させて貰ふのです。雜誌の型を文藝春秋のやうに……博士への返言は、松本社長よりお願いしたいと存じます。

—— 一五、四、一一日夜
大朝京城支局編輯局にて

井上 收

北漢山探勝の記

森 六 治

四月三日は神武天皇祭、同じく四日は日曜で腰辨共の書き入れ時、吾れく不眠不休組も本年は幸にして大なる事故も発生せぬので幾年振りに人並に暇がありそうだ。時宛かも陽春萬花の蕾も漸くふくらみ將に其の妍を競はんとするの時此の貴重なる兩日を趣味と實益と而うして職掌上意義ある過程に送らんと此に北漢山登山の壯舉を計畫した。蓋し登山は心身の鍛練となり一は強健なる氣風を鼓舞する上に最も有意義であらう。此の企てを署員一同に對し勸誘を試みたるに三日に四十四名、四日に二十一名の参加者を得た。而して余は是迄一日も缺がしたる事無き三日の記念植樹に参加する都合上四日の部に加はる事となつた。

四日は余が團長格として、午前七時獨立門で勢揃ひす、此の日天気晴朗にして朝來爽快の氣満ち絶好の登山日和となつた。宜なるかな二十一名の申込に對し三十一名となり之に愚妻及甥の師範生一名、京中生一名、尙署員の息龍中生一名を加へ一行三十五名となつた。何れも鐵腕健脚揃ひで意氣揚々と獨立門を發したるは定時に遅くるゝ三十分。即ち午前七時三十分其の服装は冬服洋靴あり夏服地下足袋あり合服草鞋ありて千種萬態なりと雖何れも申合せたるが如く輕裝なるは勿論だ。署員と學生何れも血氣盛んな張り切れそうなる元氣者だが、中に老生は只獨り聊か風物蕭條だが、しかし意氣は壯者に一步も譲らず道を綠蘿里に執り進むに連れて將に登攀せんとする北漢山は巍然として雲表に聳へ、宛も吾等を迎ふるが如し。於此一行の勇氣いよ／＼百倍、雄心勃々既に山頂を陞伏せるの概あり、進むこと三里餘にして外壁たる大西門に達した。時に午前十時三十分、門内で暫時小憩し居ると、洞の総角兩三名將に探新に上らんとする所だ。そこで一行の一人之に

道を聞くと、右せば本道だが遠く、左すれば稍險峻だが近いといふ。於此彼等に案内を頼むと一八前一圓を呉れといふ。そこで一纜角をして東道させることにする。豈に計らんや此の案内が一行をして悲喜交々ならしむる原因を爲さんとは。小憩十分餘にして其小童を先導とし谷川の流れを飛石傳ひに進む、殘雪の間を奔流滔々、或ひは龍と爲り或ひは岩を噛み、其の景情甚だ佳。斯かる仙境が京城を去る僅々數里の所に在らんとは。一行何れも欣然茫然として飽看する。然るにこの間案内の小童は恰も小猿の如く谷を越へ岩を攀ぢ暫しの間に遠く其の影を失つてしまつた、しかも途は進むに從ひいよ／＼險いよ／＼峻、坂路懸立して山は迫り道は絶へ一步も進む能はず。於此一行中忽ち悲觀の言を放つものあり遂に一時休憩す時に十一時三十分。疲勞と飢餓は一時に迫り或は怒聲小童を罵るあり或は大聲之を呼び戻さんとするあり、余は先づ戰場の常法腹が減つてはいけないと晝食を爲す事と定め、急坂に座して絶景を賞しつゝ箸をとる。斯くて激働一番更に難路に歩を進め或は灌木を力とし或は岩角に身を支へ、果ては右に斜めに左に横這ひとなり恰も屏風を立てたるが如き岩石と小雜木の中を喘ぎ／＼一步々々と危険を冒して進む。斯くして登攀する事約三四十分にして漸く先導者の待合せたる所に達し一同ホット秋眉を開く。斯くて更に

一段の勇氣を鼓舞し漸く一高峰と一高峰との間に達す。然も計らざりき其一高峰こそは實に白雲台にして身は將に其直下に在らんとは。以て如何に此行の登攀の至難なりしかを知るに足らん。若し先きに右して本道を進みたらんか先づ山城の別宮に至り、而して白雲台迄は尙二十三四町を隔つ、されば本道に依れば約一里半以上の道程なり。然るに小童の案内にて約卅町にして一氣に目的地に達したのである。茲に於て一時小童を罵詈訛責せしも始めて其の他意あらざるを知り而かもその最高所に登攀せしを喜び笑聲盛んに起る。

江の白帆を指點し、或は左眺して京城市内の風致を語る等登山の苦痛も何時しか忘れて恍惚たり。若し夫れ北漢山の歴史を繙きて往時を回想すれば興趣更に混々として一段と其の深きを覺えん。實にこの山は李朝時代の君主の蒙塵地點にして堅固なる内外の城壁を築きて其の中に別宮を經營せり。其の他寺院、堂宇等多數ありて人家亦幾百を算じ、李朝時代に於ける樞要なる別天地であつた。

斯くする程に一行中の勇者は目前に屹立せる白雲台の最高峰に攀ぢ上らんと靴草鞋を脱ぎ捨て、或ひは又上衣を脱する等愈々輕裝となり約二十名は勇躍して最高峰に赴きたるも今一步の箇所の岩石に足止りなく、その頂點に達せしは十四名のみ。此の勇者は白雲去來して眞に白雲台の名に背かざる絶頂に於て鍾路署及び余の萬歳を三唱し威勢恰も常勝軍の凱旋せるが如く得々として岩崖を降り來る。此く

して携ぶる所の水筒中の清酒或は葡萄酒等を互に酌み交し、或は辨當を喫して疲勞を醫し、歡談壯話盡くる所を知らずお互に其の成功を祝して、午后二時いよ／＼下山の途に就く。歸途舊別宮の跡を視るに六年前迄は該別宮を始め人家減少したりと雖も尙點々十數戸ありしも大正九年の大洪水に洗ひ流され今は只悲慘なる痕跡を止るのみ。暫し往時を追憶して更に北門に出で京城北門外倉前里に降る。

斯くて吾々一行は唯一人の落伍者もなく洗劍亭を經、彰義門を越へ、茲に無事解散した。時午后正六時。

◆尾崎氏新著

平田久雄

◎尾崎(敬義)さんの『有漏雜染』は、何處へ行つても、評判がいい。殊にその集輯の大部分が、曾て我雜筆に、一度は發表せられたものであるのは、恰も舊知の山川に對するやうに、無限のなつかしみを覺えしめる

◎尾崎さんは、その自序の中で語つてゐる。

『唯私の文學は、私の過去の尤も眞面目な産物であらうと思ひます、過去の私に、比較的純眞なるものを見出し得るものは、私の文學であらねばならぬ。』

◎細評は、後日に譲るが、この書がその内容と共に、稀に見る清艶なるものであるのは、何より氣持がいい。

春 淺

鐵道局百瀨千尋

ひるの日は地べたにぬく照りに
つつ松のみどりのやや生きむとす
去年の雪やうやくとけてうちしめ
る草根のいろにみどりうごくも
あさよりの雨に打たれてつらあら
き氷の堆は薄にくほめり
夜ふけまで降りぬしあめの水溜り
薄氷おきたりあさひ照らひて
つゆふゝむ庭の立木の肌しめりひ
るあたたかき日ざしとなれり

ロシヤ遊記

佐藤 作郎

のである。

モスコに著いた夜散歩にクレムル宮殿前の『赤き廣場』に行つた時宮殿の屋上高く懸へる赤旗、それが下からの反射光に依つて暗の空に流るゝを仰いだ時自分は全身戦慄するを禁じ得なかつた。

然し現在のロシヤは未だ全く平

靜とは云ひ得ない迄も、あらゆる殘虐非道のみに行けるゝ所と思ふのは西比利亞を茫漠たる荒野と思ふのと等しく大なる誤である。即ち可成安定してゐるのである。然し萬事は將來にある。現在未だ々々生みの苦しみの最中であると云ふべきであらう。彼等は純理が實際と如何に食ひ違ふものであるかを散々に體驗しつゝある。猫の眼の様に變る社會施設もその相、新經濟策もその相。要するに將來如何に安定するかにある。夫れを識者は察視すべきであらう。

貴族及び資本家の没落と共にロシヤは勞働者と小農民との集つた國となつた。警悍と華美とは大禁物である。戦前の歡樂獅モスコは今凡てのあかるさを失つて居る。戦前近世都市として凡ての要件を持つて居たレーニングラードも今は死の都となつて居。通りすがりの人何れを見ても汚れた服と不細工な長靴とで殆んど所謂文明人の感じはしない。チチエリンは或る宴會で『吾が東洋は』と云つた。外人は東洋を支那の意味で使ふことが多い。ロシヤ人と支那人とは全くの處可成多くの似た點を持つて居る。

然しロシヤは道がに藝術の國、革命時の破壊は藝術には及ばな

ゆかしい笛の音で物の哀れを感じしめる風流男も居るであらう、戀もあらう、踊もあらう——あの鄙びた型のダンツイも。

忘れられないのはエニセイ河畔から見たクラスノヤルスクの町とアングラ河畔から見たイルクーツク市の遠望。

人々はウラル山脈と云ふと、高峰谿谷を豫期するだらうが、事實は何時の間にウラルを越えたのか山らしいもの一つも見うけない唯だ其の邊り一帯が海拔數千尺となつて居るのであらう。その故にか赤松、白樺の類のたゞずまい、切り出した儘の白木の匂ひ、それに朝ならば露のしたゝりが朝日に輝いて、高地らしい清新さを思はしめるあるのみである。

ウラルの名は又ウラルダイヤやアレキサンダーなどの數々の石を聯想せしめる。ウラル地方の驛々では之等の石を賣る店がある。驛の店と云へば西比利亞名物の白樺の皮で造つた巻煙草入、シガー入寶石箱、パイプを賣る店もある。格好な御土産物になる。

赤は無秩序、破壊、殘忍……あらゆる非人道を象徴するかの様に考へて居た。此の故に驛舎や役所らしい建物に懸へる赤の旗を見つめて居ると凄慘な感にうたれたも

今頃はバイカルの氷も解けて青い水に白い汽船が動いて居よう。鐵道沿線に眼もはるかに連る白樺もすが／＼しい新芽を白はして居るであらう。此景色を瀟車の窓から眺めながら驛で仕入れた仔豚の丸焼、七面鳥の丸蒸、チーズ、カルパス或は又アグレッツに日本の香の物を彷彿しながら食事を認める味は格別であらう。

全くの處自分のみならず西比利亞の初旅に上る人は皆西比利亞を滿目荒涼たる野原である様に想像して居た。成程滿洲里からチタ邊り迄はアルカリを多分に含む地質で疎らに生えた雜草がら枯れた葉を吹く風こそよがせて居るのみであるが、バイカルから先きのいゝ景色と豊かな土地とは全然意想外のものであつた。西比利亞はいゝ處だと云ふのは決して誇張ではない。

モスコ一行の急行列車はシベリヤ主要の町々に停車する。町あれば寺あり。その寺の希臘教型、猶太教型様々の型の尖塔、その尖塔の金色の十字架。此の尖塔と白壁の民家とが小高い丘の上に夕日に映えて居るのを汽車の窓から望見する時旅人の心は淡い旅愁で一杯になる。あの町にも月の牙ゆる晩

つた。

モスコー、ボルシヨイ、テアト

アにひときわしるき露はしの花と

つた。

多くの美術館は革命前と何等異なる所を見出さず。

新しい藝術は今新なる力を以て芽生えつつある。

ブリマドンナをこそ失はれたれ

モスコイ、ボルシヨイ、テートルの昔ながらのオペラ。
同じくボルシヨイ、テートルのロシアン・パレの雅麗、舞妓ゲルツァーの妙技。

之等の藝術こそは未だ薄闇のロソ

金剛山と植物

加藤 松 林

金剛山は實に植物の寶庫であると言はれてゐます。中井理學博士によつて世界にない二種の新屬と、二十餘種の新種が発見せられ、また世界の珍花として有名な、金剛山特有の『花房草』があり松葉百合があり、更に世界第一の巨大なる龍膽もあります。香樟シロヤナギも亦金剛山以外にないもので、其他可憐な高山植物の多數をも有して居るのであります。

樹木としては朝鮮松、杜松、樅、榧及び楓などは驚くべく繁茂して居て、薜え出づる新緑の初夏の眺め、錦と輝く秋の紅葉は金剛山に於てもまた四季を通じての最大美觀であります。

夏はまた織、五葉松などの天地となります。ひと抱え以上もあらうと思はれる其等の老木の、徑の前後、谿川のほとりを理めて陽を遮り、夜ともなれば月の光りも淡く青く神秘の影をひとしほ色濃くするのです。寺のあたりには必ず野生の花咲き亂れ、岩壁を攀ぢれば紅空木の花も開き、時にはまた陰濕の溪間を好む山木蓮が、紺碧の淵に臨んで大きな純白の花をつけ、溪中その香に満ちてゐることがあります。此の花は一輪手にとつて嗅げばその強烈なる香に堪へぬ程であります。幽徑に人もあらず、ひとりの水聲禽語の渡るとき、何處ともなく薫りくるこの木蓮の妙なる香氣は旅人の心を限りなく靜寂と神秘に誘ふのでありませう。

アにひとときわしるき露はしの花と
咲いて居るものである。モスコイ
は之丈でも一度訪ねる値はあらう

◆近ごろの事

平田 久雄

朝鮮公論の新築大社屋が北米倉町の一角に出現する。

その新築披露宴とあつて、四月十一日京劇によばれる。

芝居は筒井徳次郎一行、『撃つもの撃たる』もの、『江藤新平』。いつも面白かつた。

招ばれたのは主として新聞、雑誌、通信の連中、中には得々と例の半可の劇通を振廻はすえらい方もある。

と、何とかいふ髯の先生が、酔つたまぎれに盛んに彌次を飛ばせる。たまり兼ねた日日の森二郎さん『よせ、貴様！』と一喝する。髯先生『何をッ！』と起さる。とうとう舞臺以外、も一活劇が持上る。

十二時近く退散したが、近ごろになき好い催し、主催者の厚意を感謝して置く。

二つの純文藝雑誌が出る。一ツは『朝』といひ、多田毅三、内野建兒などいふ人が中堅。今一ツは『架空』といひ、伊藤龍、張尼去來といふやうな人が幹部。また劇刊號も見ないが、のびくと發育することを望む。

藥研に凭れて

今本義胤

病める男の傍に當歳位の子供の遊び居りて主婦らしき人の影を見ず。問はず語りの仔細を聴くに、

『女房は一月前に家出しました一昨年妊娠四月のお土産持参を承知の上で貰つたのです。夫れが此の子で、龍山の兵隊の子とか言つてみました。きりやうも満更でなく手も利いて居ましたが……あれの一代記を後で他から聞きました。が、生來の男好きで……』

女房の一代記など頓珍漢の語を交へての述懐に惻隱の情を殺ぐもありしが——さすが顔には鈍いながらも怨恨の色深へるを見たり。

此無相庵は左官手傳を業とせり

洋行中の男獨逸のホテルにて便所に到りけるが、其入口にHEER BEN (紳士)とあり、之は『這入れん』と思ひ、隣のドアを見たるに、DAME (淑女)とあり之も『ダメか』と閉口せりとは壓聞く咄なり。

何れ捏り話ならむも安全地帯や切手賣捌所等の誤讀と較べて一段の可笑味あり。

昔盜癖ある子の親心痛の餘り、惡癖を矯正する藥を惠まれたしとて當時の名醫古林見宜を訪へり。門下生等は追がの師も此の難症には匙を投ぐるならんと見てありしが、見宜は躊躇なく心得たりと痰咳の出る藥を與へしかば患者は盜に入らんにも咳出で忍び込む能はず。其間道理を説き聴かせたれば盜心次第に治したりと。

現今の醫人も此の呼吸全然不要とは思はれざるなり。それとも科學的にビス健の腦細胞を抗原とせる免疫血清にても試るか。

醫師『お名前は?』

患者『堂ッ戸仙造です』

醫師『お住は?』

患者『見晴しはよう御座います

が不便な處でしてね。それに

家主が……』

醫師『お齡は?』

患者『齡はもう死んでもいい齡

です』

醫師『御商賣は?職業です』

患者『隣張り儲かりません。不

景氣でしてね』

醫師『食事の味は?』

患者『内の嫁は至つて料理が下

手で、それに私共は關西です

のにあれば關東ですから口に

適ひませんのぢや』

醫業難の一つに數ふるには餘りに馬鹿し。

○

花柳病を専門に研讀數年の後開

業せし醫師あり。病客増集せるも

それ等の多くがデカタン兒にして

大病院にて見たる態度と異なり、

無遠慮に頰廢的の咄を憂飛ばせば

相槌の餘儀なき折もあり。遂に堪

え兼ね、耳を洗つて斷然醫業を廢

止せり。

此の人今頃は人間をも廢業し、

天國あたりにて神様を相手に性病

の治療に従事し居るやも圖られず

○

慶箱より鰯の臟腑を拾ひ喰して

中毒せる患者ありとて到り診れば

一人は既に息絶え、他の一人は極

度の運動神經麻痺を來し、一語も

發し得ず、四肢は微動だに不能な

り。聽神經と動眼及視神經は侵さ

れざるものゝ如し。

『ラゲーの人よ!、キ、メ(聽

眼)は確か?』

と駄洒落どころの騒ぎにあらず。

○

西洋に粗忽なる醫師ありき。

診察室に入り來れる初診患者の

片頬の腫れ上れるを見、何等の間

診をもなせず卒然觸れみて言へり

『いたくも腫れる、手術は早

きぞよからめ』

『ドクトルよ、我は頬部の腫れ

の爲に訪つたるには非ず。此の

腫は貴下の治療を待たずして治す

べし』とて口中より摘み出したる

を見れば一塊の嚙煙草にて頬部の

腫は跡もなく消へ去れり。

幾星霜かを經たり。

件の醫師は祖國の戦亂に軍醫と

して従軍しけるが武運拙なく敵軍

に俘囚の身となりて軍事裁判に廻

されぬ。

判士は目前に引出されたる捕虜

をしげくと打戌目りてありしが

纏て部下に命じて言へり。

『此の軍醫は敵軍に放還するこ

そ得策なれ。以て敵の兵力を滅殺

するいかばかりならん』

但し該判士は偶々往年の嚙煙草

の男にてありたるなり。

中を割つて硫黄湯を注ぎ込んだといふ、三百年前の雲仙地獄が今日

雲仙遊記

— 異教徒虐殺史を思ふ —

別府八百吉

雲仙行の定期自動車が小濱温泉
いせやの前に停まつた、手提げ一
つの輕裝の私はすぐ乗込んだ、と
そこに舊知の伊關大田郡守が眼鏡
を光らしてゐる。

『ヤー！』實に偶然の同車同行
であつた、聞けば伊關君はその前
日私より一時間許り遅く小濱につ
いていせやの隣の柳川屋に泊つ
たと云ふ事だつた。

小濱から三里半、海拔三千餘尺
の雲仙嶽に登る、道路は縣で巨費
を投じて整へてゐるだけ立派なも
のである、山腹を大曲りして斜阪
に上つてゐた、去年の暮の三十一
日の事である。自動車の中からホ
ロを通して見ると脚下に小濱港の
靜波がひろがつてゐる、小濱は温
地として有名な温泉場だが、雲仙
上り約二里にして積雪を見、雲仙
温泉近くになると尺餘の雪で自動
車の進みにもぶくなつた。

數十の宏壯なホテルがある、然
し盛りは春から紅葉の秋までで冬
には殆んど客がないらしい、嚴寒
の雲仙登りは朝鮮の田舎漢位なも
のだらう、そんな事を伊關君と笑
つて話した、雲仙で新年をむかへ
やう……それが伊關君と私の偶合
した希望だつた。

新湯ホテルといふのに投じた、
私等は旅館の女中の東道で、すぐ
手近の地獄めぐりをした、別府の

地獄なんかと違ひままとまつてゐる
からすぐ一巡出来る、大叫喚地獄
とか、お糸地獄とか、清七地獄と
か色々の名目がつけられてゐる、
然も要するに想像した程濃いもの
ではなく、岩石の間から硫黄熱湯
の噴出で濛々たる蒸發が自然の威
力を示すといふ位に留まつた。

× × ×

地獄をめぐりつつ、私は徳川初
期の禁教政策の犠牲になつた清純
なキリシタンの事を思つた、記録
によると當時官憲が教徒に加へた
迫害は吾々の祖先の事と云ふより
もむしろ鬼畜の亂行と評した方が
當つてゐやう、殉教者の態度も超
人間的で戦慄すべき焚殺や水死を
甘受したとも見れる、甘受しない
迄も避やうとしなかつたらしい、
いかに當時のクリスチンの信仰が
鐵の如く堅かつたかは今日の基督
教徒の想像だに及ばぬものがあつ
たであらう。

島原の城下ではどうしてもコロ
ビを背んぜぬ婦人を全裸體として
公道を四足に歩かしめ、時々後方
よりチヨウリン坊に凌辱せしめ又
鞭でその尻を打つたなどの記録も
ある、之等は恐らく死に勝る苦し
みを與へた一例だらう。

雲仙の地獄も教徒迫害の舞臺と
なつた、裸身の教徒を縛しその脊

中を割つて硫黄湯を注ぎ込んだと
いふ、三百年前の雲仙地獄が今日
の程度の地獄であるかどうかを私
は知らぬ、然し今日の程度の地獄
であつたにしても男女の脊すじに
注ぐ位の熱湯には事欠かなかつた
らう、裸身に縛されて脊を切らる
るだけで甚しい責苦だがその瘡に
硫黄の熱湯を注ぐなどは全く地獄
の赤鬼の行爲で想ひ見るだに慘酷
だ、その中に妙齡の婦人が一人或
る時交つてゐた。

『此の牡丹餅肌を狐色にするの
は勿體ない、一つ賞美せい』長崎奉
行の幕吏が云つた。

『これは粹なお捌き有難く仰せ
に従ひます』獄卒が答へた。

二名の獄卒が婦人を抱き去らう
とした時、地鳴り震動烈しく熱湯
噴出濛々たる濃煙の中に獄卒は倒
れた……夫が行はれたとすれば大
叫喚地獄の巨響の邊であつたらう
か、沸々たる熱湯と濃煙の前に……
私は當時の場面を想像して悲壯
の氣持になつた、一面の積雪の中
に地獄の噴く蒸發がアチコチに上
つてゐる、見れば伊關君も女中君
もお糸地獄の方に足を進めてゐる
『お糸といふ女がねえ、あなた
亭主を殺してココで打首になりま
したさうな、そのお糸の首が落ち
た時此の地獄が噴き出したさうで
す』女中は云つた。

宿屋に聞いてもお糸地獄以外の
傳説は分らなかつた、異教徒の硫
黄責め……そんな事があつたもの
やらなかつたものやらと云ふ調子
である、名所舊蹟は行つて見れば
そんなもんだといふやうな氣もし
たが、何となく期待外れの思ひを
さした。

伊關君は積雪でゴルフ場に行け
ぬ事を残念がつた。

ブル公 (再び)

小瀧元司

【16】

の大八頭を御求めになり原價平均一頭八百圓つゝを御支拂になつたと承つて居りますが其内に私の御話するブル公も居るのであります

○ 前月其性忠實且つ伶俐と申して置きましたが其好例を申せば少々古くなりましたけれども三年前東京下谷中根岸某邸門前へ名まいは懼るゝ時は九月廿六日の夜半覆面の怪漢四邊の様子を窺ひ時分はよしと獨り首肯きひらりと身を驟すや横手の暗闇に吸込まれる様に姿を消した間もなく邸内から突然ブル公が大きな聲で咆へ出した、怪漢もこわ失敗たと犬を静めんとすれど益々咆へ猛るので戸板を以て犬舎の入口を塞げば戸を蹴り掻きむしり聲を限り暴れ狂ふ態に這かの怪漢も手の施す術なく困り切つて居る内に死海の如く静まつて居た近隣から人聲が微かに洩れて來るので見つかつては一大事と塀外に身を躍らし逸散に逃げ失せたとすうです。これは生後一年足らずのブル公の忠義振りです。夫れから私の處の御話をもう一つさして下さい、それは昨年の春の祭日で漢陽公園で盛に晝煙花を揚げて居つた時です、丁度風向きがよかつたので多くは私の處か白水又は静養軒鳥丸杯へ旗其他いろんなものが落下し三四個拾ひましたのち大きな鮮人に擬せるものが悠々恰も本物の如く落下し來り小庭内のかなり大きな櫓の梢に停まりました、そうすると何處から這入たか日鮮人の青年達が十四五名とや／＼と侵入し櫓に攀ぢ上らんとするあり又竹竿を以て奪取せんとし茲に暫く争奪戦が初まりました。其時で十三歳の甥も欲しくて堪らず殊に家敷内でしたから騒ぎ置きし

も惱んで居りますが之れは今後大に改める積りでです。御話が一寸横道に入りましたが假令趣味とは申し乍ら乞食の茶碗見たいな小汚いものを是れは宋時代だ是れは唐だと勝手に獨斷し天目茶碗杯と名付け大に誇りとして居る向きを見ます。が歐洲戰爭時代奉天泥棒横町で最初たつた四圓に買つた茶碗がだんだんめぐり巡りて名古屋の成金さんに勿驚八萬圓に譲渡せし由(斯く云ふそれがしも泥棒横町を廻つて見ました阿々)抑も陶器の知識もないものゝ申す事ではないが支那古老乃至知名の土より聞くも素と／＼此茶碗は苦力用として焼き上げたもので泥加減乾燥加減火の廻り加減等でどうしても二度と再び得られず又似寄のものをも造りがたい譯ですから成金さんの道樂として適當だとすれば夫れまでだが夫れこそちとキ印に近いかと思ふのであります。又一寸濫皮の剣けた女に數千乃至數萬金を投ずる突拍子もない人間の多い世の中だから悪徳大屋が少し計りごまかした處で高が知れてる、然かし往年某男が倫敦から幾萬圓かのブル公を買つて來たと云ふので都下の新聞を賑はせ悪口を叩かれたこともありました之れも聊か天目仲間と思はれます。

○ 先年攝政宮殿下御渡歐の節色々

○ 疊きにブル公の性質に付少しく御報告し且つ御飼育を御勧めして置きましたが昨今非常の流行を來せるに拘らず尙未だ一般に知識の迂遠なるに付け込み悪徳大屋なるものが跋扈し愛犬家を購置し其膏血を絞るやうです。此徒の跳梁は飽く迄懲戒を加へ根本的防衛矯正の必要あるは勿論ですが彼の歐洲戰亂の眞景中鏑山熱は非常に勃興し猫も杓子も腰にハンマーをブラ下げ一夜造りの自稱鏑山家と成り濟し東奔西走如何はしき山を擔ぎ廻り随分毒毒を流しました。然かし一面是れが爲めに未知未聞の鏑山を開發したことは事實です、してみれば趣味の國民として文藝美術にのみ相當の事蹟を貽せしも家畜には殆んど無頓着なりし同胞が昨今大に目醒むるに至りましたか。或る程度迄悪徳大屋をも寛恕せなければ却て其發達を殺くかも知れませぬ。斯く申せばあいつももうキ印になつた寫眞に狂ふて居たが今度は大かとおつしやる方もあるだらうと思ひますが大體人間と云ふものは何かの趣味がなければ却て事業の上にも執務の上にも偏頗となり又單調に傾くの嫌があるやう思はれます。殊に薄志弱行の徒が種々の弊害を醸すことが多いと思ふのであります。先づ私などは酒となり現に是れが爲めに唯今

ル公を放してけしかけたのです。

○ 隠りすること請合です。斯く申し

ツシヨンは貰つて居りませんから。

ル公を放してけしかけたのです、すると云ふと彼が咆哮一番猛襲しましたから一同蜘蛛の子を散した如く逃げ去りました。私も如何にも亂暴と心得多少憤慨して居た時

でしたから知らぬ振の半兵衛をきめ込んで居りましたところ逃げ後れしと見へ鮮人一青年より哀號々々の聲を聞くに至つて氣の毒になり駆け付けて見ればもうおそい、向ふ腔にかぶり付いて放しません

が然かしブル公と一面識の人でも家人と話したり親しくして居るのを見ると咆哮處かむしろやれて困る位です。只ブルの缺點は純種程朝寝の癖あり肝聲雷の如く容易に起きません、又子を育て難い事です、然かし是も少しく注意すれば憂ふるに足らざるようです、つまり肉よりも骨格を養ふことが肝腎

故日常アルカリ性食物を多量に餌に混することです。又少し加減わるしと見し時は純種黄末を一回の食料に小匙半杯位を混給すれば癒ゆるようです。そして一旦成犬となればしめたもの中々病氣しません、頃來各富家を初め公伯實業家競ふて飼養せらるるは番犬として

は勿論如何にも滑稽なる容貌と其勇氣を愛でらるる爲めだろうと思ひます、多少氣分悪しき時でもブル公の姿を一見せば大抵は破顔一笑せざるを得ません、故に一は家庭の慰安者となり一は泥棒よけとして上の上々なるものと思ふのであります。名前は一寸憚りませんが東京日本橋某富豪は鎌倉の別荘番の中にブル公二頭を置きます、然かも其別荘が柳橋から御連れになつた〇〇さんの隠れ家です、頑固なほりの用心のみならず粹な方にも又重寶です、諸君も別荘番として御飼い下さい屹度〇〇さんを御

護りすること請合です。斯く申した處で決して名大協會からコンミ

ツシヨンは買つて居りませんから此點は御安心下さい。

茶ばなし

吉田 莊一

殖銀の野田さんの奥さんが歌がうまい。御近作を十首ばかりとねだつてみると、主人公ニヤリ／＼と笑つてゐる。但しそのニヤリの中に『その手に乗るなよ』……といふやうな複雑なラジオが働いてゐる。つまり日曜のやうな主人公在宅日に、ウカと突進したのが、當方の策謀の落度。

○ 歌といふと、東拓の川上法學士の夫人がうまい。夫人は篠田博士の令嬢。本號に頂いた『わが夢』の、すなはな調べと、こまやかな感情の脈動を見て貰ひたい。

○ 總督府醫院の皮膚科を受持つて居られる廣田博士。しば／＼原稿を頂いたので、讀者とは深いお馴染。まだ三五六の、品のいい方だが、頭は遠はの昔キレイに禿げてゐる。で、白髪や禿を氣に病む連中『先生どうぞ御診察を』と、頭を下げて、さて科長さんのおツムを見ると、むしろ我黨の先驅なので『ムムムムムム』

○ 電氣會社の見目さんは活動をるのが大好き。キネマ通であることは、恐らく京城名流中の

随一人。むしろ西洋物を愛して居られる。

○ 京城師範の主事で、趣味の考古學で知られた白神壽吉さん、大邱女子高普の校長として最近榮轉。

○ 美人記者？で評判の京城日日の神しをり女史、二十八歳で逝く。こゝに偶像が一ツこわれた

○ 日著の大須賀さん、斷然酒も煙草もやめると傲語してゐたがトウ／＼ほんとうにやめてしまつた。そこらは實にテキハキしたもの、但しも一つ進んでやめるものが、ありはしないかどうか、呵々。

○ これは『瀬戸病院の半時間』といふやうな寫生文。……院長『もう歸つてもいいんだよ、手術は済んだ』患者『ウヘー』『何をグズ／＼してゐる』『ウヘー』『金がないのかね！』『ウヘー、この通りで、働かせないので』院長『またよく怪我をするね、去年から何度目だ』『ウヘー三遍目で』院長會計をよんで、何ほりか包んでやる『二三日おつとしとるんだヨ』『ウハイ』とほ／＼歸つて行く。五十男、鉛のやうな顔色見送つて院長、獺白『毎日／＼これだから院長もなか／＼金持にはなれんワイ』いそがはしくシガリを取り出し火をつける。暮靜におりる。

新しい俳句

津田常男

新しい俳句が解らないといふ人が少くない。何故解らないかといへば、それらの人は日本語は解るが、詩が少しも解つて居ないからである。そして五七五が俳句といふものを知覚する唯一の手懸りだと考へて居るに過ぎないのである。従つて恐らく十七字の俳句に對しても、それ以上内容を了解しては居ないのであらうと思はれる。五七五といふ調子が我々に好い感じを與へるのは、本来日本語そのものに備つて居る音調が然らしめるのであつて、先覺が俳句に之を取り入れたことは卓見といはなければならぬが、五七又は七五の調は古來の日本文學に於ては、獨り俳句のみが占有して來たものではなかつた。俳句に於ける五七五の要素を過大視して、その他のより尊重すべき要素、精神を没却して、徒に形骸に執着して來たことが、やがて俳句の墮落を導き、行詰りを呈するものであることが觀取されたときに、新しい俳句の運動が起つたのである。新しい俳句が、季節を超越したことも亦之と同様の意味がある。新しい俳句が、外形に於て芭蕉以來の傳統を脱した如くで、その根本精神に於ては依然として日本人の頭に芽ぐんだ俳句としての傳統を負うて居るものであることは、江戸時代には丁藍に袴をつけたからといつて、大正

の御代にフロックに山高を被ることが、日本人として毫も不思議でないと同様であらうと思ふ。

新しい俳句が五七五を無視した結果、散文の一節の如くであるといはれることも、その非難の一である。けれども散文の一節を拾ひ來つて、果して俳句が出来て居るかといへば、決してさういふ譯には行かない。事實新しい俳句はさういふ不用意に又無造作に製作されて居るものではない。却て十七字を固守して、之に季節を配すれば是が非でも俳句だと考へる方に詩として藝術として何等生命のない無價値なものが多のである。

新しい俳句は、何よりも詩であること、藝術であることを第一の條件として居る。それが最も俳句に清新な生命を附與して行くものであり、我々の生活要求に適つて居るものであることを信じて居るのである。そのためには、十七字の打破も季節の無視も問題ではなく、最も自由なる立場に於て、我々の生活に立脚した最も眞實な俳句を産むことが要求されるのである。

友人山與水の所藏する一軸に、大翻の小品がある。それは硝子の金魚鉢に一尾の金魚が浮遊して居るに過ぎないものであるが、その金魚は確に生きて居る。私の先頃求むべく餘儀なくされた山水の一

【一六】

軸は山あり水あり、柳は芽ぶき、桃は満開の中に一亭があつて、その中には端然たる書机が置かれて居る。私はそれによつて、時は方に春であることを感じさせられるのであるが、それは誠に空虚なる春である。床の間の懸軸にはこの方が賑かであり、場合によつてはふさはしいともいふことが出来やう。しかし私はそこに繪としての力を認めることが出来なかつたのである。新しい俳句と古い俳句とは、この二つの繪の對照が聯想されるやうな氣がする。

前代の形式を踏襲して、十七字と季節とを墨守して行くことが、單なる消閑の娛樂であり、上品なる趣味であると考へて居るだけならば、それはそれとして問題とすべき圏外にあるものとしてよいのである。しかし、新しい俳句の成長が直接間接阻礙される事情が之に附随しやうとするとき、これらの墨を啓くことは必要であらうと思ふのである。

最後に、私は京城に於ける我々新しい俳句に志を寄せる人々によつて組織されて居る京城俳句會の存在について一言して置きたいと思ふ。同會は毎月數回例會を催し小冊子『藁』を發行して各自の研究、發表に資し、又たそれによつて鮮内各地の同志とも聯絡をとつて居るのである。しかし、同人の數も未だ少數であつて、外面的の隆盛を遂げて居る譯ではない。又それが同會の目的でない。要は各自が相率いて健全な發達をなすことを期待して居るのである。之を個々について見れば、必ずしもその主張するところが完全に具体化して居ない場合もあるであらうがその抱負とするところは相當大い

のである。新人の來り加はること

を一概に趣味の問題とし、餘技、

筆への投稿に適當の材料を見出し

に棒をつけたからといって、大正

求むべく餘儀なくされた山水の

その抱負とするところは相當大い

のである。新人の來り加はること
は同會の最も望んで居るところで
ある。

私は私の未熟にも拘はらず、新
しい俳句の爲に多少角笛を高唱し
過ぎた感がないでもない、句作を
するが新舊の如何に拘はらず、之

を一概に興味の問題とし、餘技、
末技と見做すことは人々の任意で
ある。しかし、一端之を肯定する
立場に立つならば、その限りに

て、我々がより眞面目の態度を持
することに努めることは必要にし
て又望むべきことである。京城雜

筆への投稿に適當の材料を見出し、
能はなかつたことは、私をして偶
々以上の言葉を費すことゝなつた
のである。

◆無駄ばなし

吉田 莊一

永樂町の酒井婦人病院長、快活
で、面白い人だが、どうかすると
ころげるやうに狂歌や俗論が口を
吐いて出る。しかも仲々の傑作が
ある。

將 對局秘訣 (二)

將棋八段 金 易 次 郎

素人方の對局を拜見してゐますと、歩などの遣り取りは
殆んど何でもなく考へてゐられるやうですが、これは大變
な思ひ違ひだと存じます。少し上手にかゝると、タダくれ
る歩をうっかり取ると、キツト向ふのハメ手にかゝります
また如何にも局面に手のない時、さア取れと一步を敵に與
へてごらん下さい、そこから指口が開けて來て、十分戦ふ
ことの出来る場合があります。こんな風に、歩は重要大切
なものゆへ、それを無意味にやつたり取つたりは、甚だ感
心しないのであります。

また素人方の對局では、敵の飛角が我陣地に近づく
何も實害がないのに、唯だあわてゝ一步を打つて、これを
撃退してゐますが、これも理由のないことだと存じます。
さし寄り妨害にならねば、敵の飛角を宙宇にブラ／＼させ
て、機を見てそれを取る手段を講ぜねばならぬ。一步を打
つて、これを安全地帯(敵陣)に退却させて了つては、味
も何もないのであります。また王手飛車手などの機曾があ
ると、所謂泡を喰つて、スグその手をやつてるやうですが
これも感心しませぬ。その王手飛車手を質にとつて(即ち
いつでもその手を行くぞと見せて)もつと／＼緊切な手を
案出しなければなりません。一方に、つみのあるのに、それ
を放擲して、唯だ敵の飛車取りに夢中になるなどは、あま
り罪がなさ過ぎると思ひます。

この間も或人を訪問すると、座
に立派な達摩がある。そして『酒
井先生、これで一ツ出ませんか』
挑戦せられて、敵にうしろを見せ
る人でない。よろしいとあつて詠
んだのが、

何を小頼な達摩でさへも
一人寝ぬとて起きあがる

先生はまた世話好きで、よく結
婚の媒酌などをするが、この間も
世話した若い夫婦が、赤ん坊を産
んだので、その内宴に戯れて曰く
しの字に寝たのがりの字ぢ

いつかしまひに川となる
あらまアといつて、顔を赤らめた
かドウか。

これは少々他聞を憚ることだが
或知合の老人が訪ねて來て、實は
お恥かしい話だが、どうも娘が不
身持で……先生に一ツ御意見を
ある。イヤそれは我輩の任でない
もつとエライ人から話して貰つた
らドウかと辭退して、客が歸ると
『これはどうだ』と看護婦に見せ
たのが。

七ツ八ツからいろはを覚え
はの字忘れていろばかり

端午雑唱

井上 收

高原の節句を歌へる

高原の桑の細のそのはての小徑にそひて幟立つ家
さいつ頃みまかりたりし赤彦のあれたる國そ
葛浦はな咲く
山は高く樺林の青みたるその山懐に葛浦酒く
む
やちまたの都大路の端午よしみすゝかる野は
わきてなつかし
はた／＼と雑木林のそのはての白壁の上に幟
高鳴る
白壁の土蔵の屋根のその上に吹流し見ゆ風車
見ゆ
竹藪と雑木の森にかこまれし我家の空に鯉の
おどれる
山里の海にも遠き國なれど鯛を祝ひし思ひ出
もあり
物の具と旗ざしものと甲冑と庭にかざりて
午來りぬ
柏餅と粽をさばに欲りしたるいとけなき日の
我家おもほゆ
床の前の膳に坐らせ正客と祝きめでまし父
母いまおほさず
鯉のほり祝ひ玉ひし父母の一人もまさは嬉し
からまし
粽おもふわが母人は遠みかも五月ぞさばに母
を欲りする
その前夜ちまきを作り母人は曾我兄弟を聞か
せ玉ひき

學校にて葛浦刀の歌を知り三十餘年のいまま
忘れず
葛浦湯の内にくらまり喧嘩などしたるその日
の吾なれしかな
葛浦湯の湯槽の中の葛浦にて鉢巻したる昔お
もほゆ
その昔すぬぶん古くその昔葛浦折らんとて蛇
に追はれき
葛浦湯に／＼かり合ひたる彼の少女人妻となり
その後知らなくに
筒井筒彼の少女子とちまきなど奪ひあひたる
童なりしが
ちまきにて指を切りたるその利那血どめを呉
れし彼の少女はや
おさなどちかみしも着けて太刀佩きて節句し
たりと新渡戸先生
小日向の新渡戸博士の邸にて武家の節句の話
き／＼けり
町に産れ町に育ちし吾子らは櫓の葛浦も蓬も
得知らず
初轍を／＼し勇ましすこやけく千代もへぬべし
八千代かはらぬ
兩の掌の指にも近く吾子の爲端午祝はんすべ
もあらなくに
草ぶきの屋根の上舞ふ鯉轍達の茂みは昌徳
宮の苑

或人の出産の賀に

めでたまへ雄々しくたけく愛でたまへ黄金白
銀たぐひあらめやも
はぐ／＼みて玉と抱きて朝夕におほしたてなば
やがてめでたし
久しい間の生活と育児に疲れ、歌を忘れ
て暮すこと十有餘年、故郷の先輩歌人島
木赤彦氏の長逝で、ふとあの懐かしい高
原が想ひ出され、ゆくりなくもこの歌稿
となる。

櫻花日誌

中島 司

△五月五日、端午の節句、青葉若葉の風薫る。

庭の櫻は殆ど散つて、若葉が美しい、僅か一日二日の間に葉がうんと大きくなつた。昨日まで気がつかなくつたが、藤の芽が開いて白花が膨らん

だ。中には咲いたものもある。楓の新芽が一葉一葉雨傘を半分開いて伏せたやうだつたのが、立派にひろがつた。

△五月六日、自樂莊の若葉、夕日に照りかゞやく。

……私は自樂莊日記に、櫻が咲いて散り、若葉になるまで、朝な夕なに眺めた有りのままを書きしるした。彼の南山の舊草廬の周りには大きな櫻の木が十数株、やゝ若きを加へて二十株からあつた。満開の頃南山の中腹から見おろすと家は殆ど花に隠れて居た。楓も少からず植えられてあつた。その若葉は秋の紅葉にも勝りて美しかった。書齋の東窓ぎわに白藤が咲いて、其の香に集ふ蜂の羽音が晩春初夏の情趣を加へたもの一つであつた。思へば南山自樂莊生活の私は、自然の寵兒であつた。

京城の春は清くて明るい。心のかな春だ。その情景からすれば和歌の春や俳句の春と言はむより寧ろ漢詩の春と言ふに應はしい。
(大正十五年四月五日夜品川御殿山にて)

◆筆のしづく

平田 久雄

『我輩にやわらか物を書けといふのは無理だ……』電通の吉川氏がいつてゐるが、氏の夫人は本誌の愛讀者で、また相當書けるらしくこの間もおん々史の『十四の春』を『なか／＼よく纏めてあるわ』

京

城

雑

筆

上野の櫻チヲホラ咲き初め、都大路の人の足どりも花に浮き立つ今日昨頃、そよ風に京城の花の春がしのばれる。わけても、住み慣れし南山の麓なる、我が舊居自樂莊の明け暮れが憶ひ懐かしまれる

東京とくらべて、京城の櫻は少なくも半月は咲き後れる。さらば今頃は南山あたり漸やく蕾が膨らんたほどであらう。それにしても寒さが長く、春も暫らくは冬心地なる京城の人々は、其處彼處の櫻の枝がほんのりと色づいたばかりでも、早や心ときめきて、本町通りなどは、さゞめく人の足繁く、店々の飾窓、照明も賑びやかに、往き來の人の春心地を一層暖つて居ることであらう。

懐かしの京城の春、その春光にひたりしも幾年月ぞ。都の片ほとり、品川の沖から吹く宵の春風にさやさやと鳴る庭の檜の葉すれの音を聴きつゝ、私は大正十四年の我が自樂莊日記を繰つた。

△四月二十日、庭のつゝじが咲き出づ、柳芽を吹く。

△四月二十二日、つゝじが咲いた、連翹が咲いた、杏の花も咲き初めた。

△四月二十四日、庭の櫻チヲホラ咲き初めた、数日の後は満開であらう、

△四月二十六日、我が自樂莊の櫻が半分ほど咲いた。

△四月二十九日、自樂莊の櫻は今日が満開だ。早や散り初めんばかりの満開だ。朝はまだ少々蕾があつた。夕は一つ残らず開いた。

△四月卅日、櫻次第に散り行く△五月一日、夕、書齋に在り、眼を窓外に放つ、日すでに沈み、暮れがての光線鈍し。散り果つるに間もなき櫻の小枝が、微かに動いて居る。窓近くの楓の若芽が伸びて、葡萄茶色の美しくさ。向ふの岡のつゝじの桃色がぼんやりと夢のやう。連翹の黄が褪せて、ポプラの芽が薄緑に彩えて居る。春は今熟しきつて居る。

△五月三日、昨日の雨にて花が大かた散り、満庭の落英、雪の如し。横の枝葉に積む花片が雪のやう。雨で緑がずんと伸びた。

△五月四日、我が自樂莊の櫻は枝頭僅かに花を残すのみ、多くは散り去つて土に歸つた。『可惜落花君莫掃』此の数日は、家人に命じて一切庭を掃かせぬことにした。散り布いた花の眺めは又格別だから。

菜食一年

酒井一郎

私が先日曹谿寺に参詣した時、茶間で或る坊様にあなた方も矢張り三度御飯をおあがりですかと問ふた。居並ぶ坊さんは此輩醫者何を云ふやら犬ではあるまいし人間だもの云ふ様な顔付で、無論三度三度頂戴致しておりますと答へられた。お菜はと問ふたら油揚ヒジキにガンモドキ其他と答へられた。それでは肉食けと問ふた處が、檀家へまへれば出されたものをいなむ譯にもいかず止むを得ず山海の珍味をたら腹たべますと、それでは三分位は腹中に貯蓄なさるのですと云ひますと、矢張りその通りと何かなし今様問答の様でもあり此間衆生を濟度された様な氣もした。京坂雜筆の三月號に『或る畫席』と誠に奇麗な題が出て居りましたが恰度その畫席と化する前席は至つて亂席で、より合つた名醫が談風論發卓をたつき口角泡沫をとばして話をなした。小生は一年前より始めたる一日二食菜食主義よりの體驗について述べた處が彼處此處より牛飼や豚引先生等驟起して反對論が唱へられた。小生はかゝることもあらむかとその前に不必要な饑の浦燒一人前を廿八計りの人の前に寄附を申出で置いた筈だ。それは廻覽吸香の後誰かとおあがりになればよいとの考へから。そしてその先生方の説では肉食者は精力旺盛常に若返りく多産する事の例をひかれた私は唯仰せの儘に聞いてゐた處が、先輩工藤ドクトルは先年禪に籠られた時の所謂薄粥にシジミ貝が入つてゐると思ふて箸で抓んだら自分の眼玉が寫つてゐたと云ふ様な味噌汁を食してさへ、人一倍の働をなし得、今の科學に捕はれた

醫學は感心できぬと議論されたが、工藤氏の當時を知る肉食論者は仲々承知せぬ。あの時我々は如何に心配せしか顛骨聳る眼窠は落ち顔色草葉に髮鬚末期の水も今暫しの有様肉食を始め蘇生復活せりと、茲に於て小生は矢張諸君も自我の念切なるものがある、人間は良惡共に現在自己の爲しつゝある事が最も良しと考ふ、即ち惡固まりに固まれば中々變更は出來ぬ、小生が大正九年十二月から信仰方面に志した、その當時お經を讀んだり御詠歌をあげたりする時人の前殊に患者にきこえたり亦殊數を患者に見せたりしてはさぞ縁喜思しく思ふだろうと誠に遠慮であつた、それは謠曲を習ふ頃山の上や田の畔でやる時は聲も出るが、人の前では遠慮なのとは大分異つた意味合である、其處で小生は斯様に申上げた、人間は先づ自己を第一に知る必要がある、これは誠に六ヶ敷い事で且つ容易な事である、小生は醫者になつて十八年間だが性相學を學んで二十年になる、これが私の財産であり寶である、人よりは幾分世渡りが樂である、常に岡村介石先生にも語つてゐるが私には人と對談する時用意の何物もない、臨機應變に出る、之れは物知りでないから用意がない、それで性相學の力を借りてその應用をやる迄である、餘談に亘り恐れ入るが先づ自己を知り菜食に適すと考へなばそれでよい、肉食がよいと思ふたらそれでやつて見てよいと云ふことだけでつけた。病理學者の徳光君も科學方面からひやくと拍手した。

處で私は數年前迄は喰ふ爲めに生きてゐたが今は生きる爲め喰ふ主義をとり人間は二度三度時刻を定めて喰ふ必要はない、何も時計に催促されて喰度もない飯を喰ふ必要はないのである一年前よりは健康の爲如何と云ふ譯で朝食抜き菜食二食主義をとり肉食を絶つた。東京駒込病院長二本博士は昨年来鮮の御京日來青蘭に於て菜食主義を稱へ二食論を薦められたが氏は一日一食を五年間一日の如く續けられ不斷の精力

雑唱

市山盛雄

博物館にて

ふるびたる石の菩薩のけだかくも立ち
ませるみればたふときろかも
これやこのいにしえびとのきざみたる
石の菩薩の並びたたせり
いにしへの王者すみにし石疊いたくへ
こみてほこりたまれる

秘苑にて

やんごとなきひとのむてふ靈泉のこ
ぼれをのみていきつきにけり
このあたりかしこきろかもひつそりと
ものおともなく木立ただ立つ
坂道を下りきたれば吹きすめる松のひ
びきのさやかなるかも

温泉窓の月

寝ながらにみてゐる月のさやけさに夜
更けをひとり眠り惜みつ
ねむらむとすればさやけき月の光蒲團
の上におちてあをしも
さやかなる月のあかりをみてあれば病
み臥す妻の寢返るけはひ
夜のふけをいばりにゆけばしらじらと
月の夜道のひそかなるかも

を以て患者に接してゐられる。小生は最初混食であつた、昨年四月遽かに菜食に變じた頃は餘程營養な菜食料理を調理させ一家を困らせた、二ヶ月程は日一日と瘦せ顔色も衰へ友人諸君も心配された、乍然屈する事なく忍耐した。然るに八月に及び次第に恢復近來は再び舊體に復した。且つ今日にありては菜食も頗る簡易で晝の第一回食には蕎麥二碗麥飯(米三分麥七分)一碗澤庵二切れ。第二回食即ち夜は麥飯二乃至三碗豆腐、コンニャク、野菜、漬物、時としては蕎麥二碗、夜豆腐半乃至一チヨウにて終る事あり昨秋蕎麥のみにて三日間二食宛食せるに、患家に往診産席に侍し瓦斯通發大に面目をけがせし事あり、漸次練習の上舉行する方針なり、親鸞聖人は蕎麥を常食とされしと、小生も今日にありては主食は蕎麥と稱し差支なき程度なり、旅行先にては先づ第一蕎麥屑に飛び込む、昨年春も名古屋婦人科學會終るやその夜信濃の善光寺に詣で旁々長野に蕎麥を味ひたり、斯る次第にて人間試験には先づ此等の食物にて及第せるものと考へられ三十年間のロイマチスも此等の事の變化により先づ疼痛は皆無となり肉食より來れる酸中毒性のものなりしを知りたり、少くとも小生の體には食物の酸を中和する能力不足なりしを思ふ。以上の事は健康を維持する爲めに一方よりしては極めて經濟的と思ふ。且つ時間の經濟ともなる。今時の人間はちと何事によらず贅澤と思ふ、人に不義理をして迄營養食をなし迷惑をかけるよりは責任を充分果し終る迄は蕎麥屋の二階にでも下宿して然るべしと思ふ。唯だ人間は趣味方面異なり嗅味の感覺も天より與へられたるものなれば時に嗅味感保養に一家團樂の夢をむさぼらるゝもよからむ。唯食餌變更の數月間稍や凋衰するは約六十兆に近き細胞群よりなる人間個々の舊胞が一時に今迄の給料に逸樂せる處に財政整理に會ひ醉餘羊妓の蔭枕に蕩然たり得ざると同一義である事を十二分に吞込んで頂きたい。

「アノ時許りは悲しい様な、嬉し
告事件の豫審が終結して、決定書
んな時に八字齋先生は唯ニヤク

い様な、譯の判らぬ涙が止度なく
出て、鼻口の邊がヒツ、ル様で、
生れて初めてだつたよ』と流石の
も後日僕に語つた事がある。○

宿屋に俵で送られて行くと、父兄
が待受けて夫れく定めぬ室に案
内する。僕の父は前日から身體の
具合が悪くて、二階の一室に静養
して居るので、學友の某が監獄の
門前迄来て呉れたのであつたから
濱崎に着くと外の人に挨拶する間
もモドかしく、父の居室に這入つ
たが、父は思つたより元氣で『オ
、歸つたか』と兩手を差延ばした
のである。僕はいきなり其手に繩
り付いて、泣いてく約五十日に
至る苦みの不平を……父のせい
もないのに……訴へ度い様な氣も
したのであるが、只涙が沸き出て
聲が咽につまつて、身體の自由が
きかぬ様な氣がして、そこに座つ
たま、嗚咽するのであつた。其時
の氣持は何としても形容する事が
出来ぬ。若し其席に日叔父さんが
居合はせなかつたならば、恐らく
僕は悲喜悔恨の渦の中に其まゝ氣
絶したかも知れぬ。

『架空』發刊

伊 藤 龍

『架空』は對衆文藝的讀物の向上と普及を使命とした。
言はうとする事を云つて見る。
思ふ事を書いて見る。
叫びたい事を叫んで見る。
過去の行動から新しい行動へ。

『架空』の眞求はそれである。其眞求の具体化は人間を
して對衆を感知させようとする光輝である。そして、その
明るい光線の下で、働く人間は人間の自由を、眞實に獲得
される譯だ。

對衆に生きることが人間生存の目的である。で『對衆に
生きる』と人間が感知するまでの行程は自然である。が、
超して人間の生活は對衆を知ることである。

永樂町人氏は對衆に生きて居るのだ。私は其氣持を視る
と躍動したくなるほどに感觸を刺戟する。
それが、人間の向上の分解である。

『架空』は對衆に生きる刺戟を探求したい。
『架空』は、所謂人間の向上の分解圖である。

『架空』は對衆に生き様とする人間の努力を讚美したい
『架空』の生命はそれであるのだ。
鮮土に『架空』が胎息した。腹から飛び出した。手を延
ばし、足を擡げた。

『いゝ見だ』とか『大きい見だ』とか人間が云ふ。だが
そう云ふだけで、口を嚙んで了まふなら無駄な人間がする
氣紛れである。その見を大きく育て、見ようとする所が人間
的なのである。それが、對衆に生きようとする心持だ。そ
して、其實現が『對衆に生きる』と云ふ譯で、それは、『
架空』が永遠性を培ふ對衆で、私の望みである。
京城雜筆の存在と同時に『架空』の存在を促して欲しい

◆ 頰杖ついで

吉 田 莊 一

◎平壤電氣の宮川翁といふと、
天下の豪傑を以て、自ら任じてゐ
る先生である。

◎ところが、今度の電氣料金問
題には、流石の豪傑もスツカリ痺
せたといふ評がある。

◎お隣りの鎮南浦では、社長は
一文も取らず、却つて何かの時に
持出してゐる。ところが平壤では
年額何萬圓とかを取つてゐる『こ
れはどうだ』と詰めよせるので、
先生兩手を振つて『事情が違ふタ
イ〜』は氣の毒。

◎平壤電氣では、横田事務が立
派な人物、今度の問題でも、むし
ろ同君を矢面に立たせたかつた。

故郷

中島長作

〔118〕

私の生れ故郷は裏日本の淋しい漁村で最近漸く山陰本線が開通した位で文明の恩澤からは遠ざかつた所であります。

従て漁村の人達は比較的淳朴で粗野で正直であります。京城等から時々歸つて見ると都の人達には恵まれない人情美やローカルカラーを味ふ事が出来ます。

世界的にも有名な日本海の荒海に直面した山陰の海岸は一體に自然の威大なる力に恵まれて居ります。表日本の優美なる長汀玉浦白砂青松に對するに四時波頭巖壁を洗ふ勇壯なる光景、累々たる岩間に恵まれぬ生立ちを物語る千年の老松、其れ等は皆彼の女性的風光なるに反し男性的の雄々しさを保持して居ります。旅窓に親まれる人土には是非一度山陰本線を通過して其の男性的風光に接して載きたい。

表日本の山陽東海本線にも随分風光明媚の山水がある、須磨明石の白砂青松、あたかも鏡上を行くが如き瀬戸内海の遊覧船、上つては靜岡の茶園、富士の遠望、濱松辨天嶋等敗撃するに違ない次第である。而し私共にははしむれば其等は皆温雅な女性的な箱庭風光に過ぎない。

而して足一たび山陰に踏み入るや日本海の波頭奇岩を生み百年の墟風に耐へたる老松の技振り墨青

に光る葉頭波上西に没する日本海の夕陽、其等を左に見て汽車は千仞の斷崖の上を走る、身あたかも水中を游泳するの感ありと思へば無数の大小トンネルは奇岩に身を吸ひ込む其奇蹟に思はず快哉を絶叫せしむるものがあります。

此等の奇岩奇松は皆地理學者間に異論なき日本列島の東部移動を如實に物語るものであります。

日本海岸は常に海水に蠶食せられ海岸は年々東に退歩して二十年も前は立派に田畑であつた所が今は海中遠く沈没して爲めに村は東に東に移動しつゝあります故郷に五十年來足一歩も外にせざる古老が海岸に立ちて幼き頃親しき友達等と喜戯せる白砂の邊を回想して轉た時世の變遷と自然の力の威大に感慨を催せるのを唯時世に獨り取り残された古老の愚痴だと見逃す事は出来ませぬ。其所に熱烈火の如き郷土愛から湧き出でたる自己の土の自然的消失を悲しむ心情と年と共にさびれ行く漁村の運命を暗示する何物かの様に思はれてなりません。

永遠から永遠に叫を續ける日本海の努禱は雄々しい男性の最後を物語る様に響き、絶へず一種の悲壯な感興を起させます。山陰の地は如斯き地理的理由から生れた奇蹟と純眞なる人情美を多く持つて居ります。

海に生れて海に死する淳朴なる漁師達は海の威大、海の壯嚴に對して絶對の信仰を持つて居ります。漁村は海を中心として常に平和であります。未だ三十年來村から一人の犯罪者すら出した事はありませぬ。以前此村に一寸と巡查の駐在所が置かれた事がありますが平和な村には不必要のものとして直ぐ隣村に移轉されました。

漁師達は私達が考へれば馬鹿らしい様の事ですが海に對する迷信を確く信じて居ります。今其二三を書いて擲筆致します。

一葉の扁舟に頼りて大海を來往する海の生活者に取りますと天候が其生命でありますから天候の觀察に就きますと彼等は特別鋭敏なる感覺を経験上持つて居ります。今日の科學的天氣豫報等は信じません、彼等は極めて原始的なパロメーターとして水蟲を硝子瓶に養つて居ります。其水蟲が瓶中で水上に浮び上る時は其日は必ず天気で底に沈む時は荒天になるそうです。

其れが非常に正確に當る由です亦突發的に颶風等になる時には前夜真夜中に村の鎮守の社で誰も居ないう御神樂大鼓があがる由で其大鼓の音を聞いたら朝如何に天候良くとも出漁する者は一人もありません。

其位注意しても一年には三二人位は出漁して荒天に遇ひ行方不明になる者があります。其死體が如何にするも發見されない場合に葬式が實に奇抜で、死人の爲めに寢棺を造り其底に濱の白砂を敷き其れを親類故舊等が集まりて本人の出漁したる場所に置き死した者の名前を聲を限りに呼ぶ、すると死體は何所にありても其靈魂は其聲に

導かれて歸來し其寢棺の中に這入

に寄り添ひて引揚を懸願する様で

は其母に崇りてなす其母に似て

導かれて歸來し其寢棺の中に這入り、敷き詰められたる白砂の上に兩足の足跡を判然印する由で其れを以て死體に代へて葬式を営むのである。其光景は誠に原始的で且悲壯なものである。

亦漁師等が沖に出漁して朝未明何所の者とも知れぬ土左衛門に會ふ事があると死體はしきりに舟端

に寄り添ひて引揚を懇願する様である。其時漁師等は生ける人に物言ふ如く今は朝出漁の路なれば歸路には必ず引揚げ連れ歸る故其迄我慢せよと告げると死體は自然見へずなり歸路には例へ其舟が路を

變更しても必ず其舟に付きて浮び上り救を求めぬ由にて若し其れを見捨て、斷る様の事があれば死體

五月の夢

日暮支店 藤田積潔

若い一人の男がいつのまに來たのか或る川の堤の傾斜に身を投げて居る。前面には大都會が展開し、左の方には小高い丘が見える。日ざしのかげんからみると春もよほどふけた日の午後らしい。すぐ上の中学校のグラウンドには日曜なのか何の聲もない。

突然、すんなりしたつい最近嫁いだらしい若い奥様風の女が右の方から現はれた。二人が逢ふのはよほど久しぶりで又豫期もしてゐなかつた、といふことがどうしてかはつきりわかつた)のに、どちらも何の挨拶もしないでさも當然らしく「私ね、こんど實家へ歸ることになつたの、遊びにゐらつしやいな」と女が口を開いた。そしてすぐ左側に腰をおろしてちつと男の顔をみつめてゐる。急に男の頸に兩手をかけてぐつと引きよせ、自分の頸をつき出した。男はうろたへさけるやうにして首をめぐらして人目をばはかる様子だつたが、近くに人氣がないと思つてか不安ながら口づけを許した。二三寸のところ互につこりとしては又……。三度こんなにしてから女は、つと堤の上に立ち上つて「ね、ほんとに遊びにゐらつしやいな」といつて丘の方へ歩きかけるとはや中程までのほつてゐる。男は終りまで一言も口をきかない。

まだ太陽は高くあたりは静かである。

は其舟に崇りをなし其舟に限りて不漁になるとか荒天に會ふ由で漁師達は土左衛門を非常に敬遠して居る。

◆茶を啜りて

吉田 莊 一

◎千とせの女將は、その牛生の紅恨紫怨を、小説體の目叙傳として天下後世に残しておきたいといふ希望がある。

◎そこで、或る文士が、代作の希望を以て、一日その書きだしのところを、一寸拜聴に及んだものだ。ところがそれが『艶説博多の巻』といふ頗る以てこつてりしたところなので、謹聴六時間スツカリふら〜になつて『いかん、迎もいかん、我輩の手にはおえないワイ……』浩嘆三回に及んだとはさて〜氣の弱い話。

◎花仙うちおえんさん、東京花見物とあつて、このほど上京。その前に『あなたな行かない?』、隨行する氣はない?』と、大毎の大森さんにいふ。『ウ、僕も用件がある、大阪ぐらゐまで、お供するかな』軽く約束しておくと、立つ朝電話がかゝる『折角だが、こつちに急用があつて、アレは中止さ』さう答へると『まあやめるの、つまらないわね、貴郎月給取なんからおよしなさいヨ』大森さん忽ち首◎惜しい人物は、先年死んだ花月の番頭本郷さんだといふものがある。京城名物の南山の花月別荘は、本郷さんの才覚で出來た。しかも非常な讀書家で死んだ時『よくこれほど集めたものだ』と藏書を前にして、知己一同今更にその人を惜んだと。

君子山の麓まで

吉岡久

【一三】

水溜があつてその中には数百羽の鴨が泳いでゐるではないか、一日中雉子を追ひ廻す好獵家諸君、今一步踏み出して此の鴨をせしめたら何うであらう。

道を尙急いで行くと泥の深い田ノぼ道で而も此の畔の様な道を盛装した花嫁が輿につけてやつて來たのに逢つた、箱の様な荷物や風呂敷包の道具に續いて天神輿の親爺がニッコリともせずに朝鮮馬に跨つた光景、堀田から續いた潮がヒタ／＼と漣によせて、煎茶壺小屋の藁屋根から白い煙が立つてゐる。平和なる大自然よ。

かくして自分は馴れぬ旅に疲れて田の畔に休んでゐると、突然頭の上で小さな鳥が黄色い聲で鳴き初めた雲雀だ！ 倦ういふ聲が一行人達の口から洩れる。

高い聲だ、鋭い聲だ、朝鮮に來て初めて此のリブラノに接した。

あゝ早い！ 早い！ 鳴き乍ら天に登つてもう姿が見えぬ。一寸靴の紐を締め直すと雲雀はまた野の上に歸つて來た、飛ぶ事の早き鳥よ。

田の畔道添ひに行くこと里餘飯を越えんと落葉松が田の中に聳えてゐる。

小笹原を越え、枯草山を踏んで行くとき小さな部落の中に入つて仕舞つた。その裏畑の柿の木に黒い大きな鳥が澤山とまつてゐる、よく見ると内地の烏だ、朝鮮に來て今日は雲雀を見て更に烏を見た。然し其の動作が大陸的でも云はうか何とはなしに鈍重である、そしてそこに一種の悲哀を味はせる。

尙歩きつゞけると君子山は近づいてもう竹栗里が迫つてゐた。出迎へた營業所の主任と挨拶をし乍らふと向ふを見ると、田の中に亭

三月二十七日堀田で名高い君子面に煙草小賣人集會をやるので行く事になつた。

處が三日風が烈しいので船を出さないし堀田行の發動汽船は今中止されてるので『困つたなあ』と思ひ乍ら仕方がないから素砂まで汽車で行つて、それから四里半の道を徒歩するより外方法がない四里の道は平坦な處なら何でもないが此の四里は實に困難な道であつた。

一行は專賣局から二人と組合の社員を通譯の爲めに一人、いつも連れて行く支配人が風邪で行けなくなつたから自分一人と合計四人の同行だ。

十一時札幌發の汽車が十二時一寸前に素砂に着いて、そこから弗々と歩き出した。

雲もない、紺青の天空、その中を吹き巻く烈しい風、早春の郊外には未だ寒さと冷たさがあつた素砂驛から二町ほど行つて、急坂を辛じて越えたと右に聳え立つた蘇萊山が、ゆつと其の威容を示してゐる。

麓には細い道に添つて七八軒の部落がある。

大正三四年の頃の事だと聞いてゐるが、此の村に一人の孝子があつた處、親が長の病ひに藥代に困つて仕舞つた、困つたといふよりも借金で首が廻らなくなつて仕舞

つたのだ。處がある夜『蘇萊山の頂に見事な人參があつて、それを取れば金持になる』といふ夢を見たのであつた。そこで其の先生早速翌朝山に攀ち上つて夢の告げの場所に行つた處果して人參があつたので早速持ち歸り、賣放つて借金を返し而も其地方の金持になつたといふ事實が此の村の人々から云はれてゐる。

其の話を思ひ出し乍ら歩いて行くとき其の麓村の裏畑に白髪のお人がしきりに草を刈つてゐる、枯草をむしつてゐる、自分は何氣なく通り過ぎようとすると同行の專賣局の人か『あの老人百一歳です』といふから實際に聞いて見ると正にさうだ。若いものも及ばぬ此の老人蘇萊山麓きつての長命者であらう。

かくして二里位ゆくと、蛇川場（今は新川里）といふ市場に出る只一軒しかない内地人の雜貨屋に立寄つて、温突の中で世間話をしながら餡パンと牛肉の鑊話を晝飯の代りとしてすぐに出立した。

道は此處から悪くなつて道といふよりも田の畔を通るといふ方が畑の中を通るといふ方が適當かも知れぬ。

かくして行く事二里蘇萊面が終る頃浦里といふ處の田の中の一軒屋に少憩した。その裏口は遙に田に續いてゐる。三四町離れた處に

々と立つた十本ばかりの松の樹の間から君子壺田がかすかに見えてゐる、その中に驚の様に白いものが動いてゐるのは壺田の入夫であらう。

先日京城の煙草會社の高木徳彌君が來仁したとき、色々話しの末「此度あげた竹葉營業所はずい分淋しい所ですよ」といつたがまさか程淋しい處とも思はなかつた。オンドルに疲れた足を休めてから主任と話をしていると、もうランプがついた、さうして夕飯が運ばれた。塩魚や菜漬や漬物の外生栗だの蜜柑だの卵などが運ばれたが、さて到底箸をとる勇氣がなくて困つたなあと思つてゐると、七輪が運ばれてそこには新しい鍋に豚のすき焼からまさうな香りを立てゝゐた。是れなる哉！恠り思ひ乍ら飯を食ひ初めた。

後で聞けば自分のために事務員が氣をきかして君子壺田の雜貨屋迄一里半の道を砂糖と醬油とを買ひに行つて呉れたのであつた。

さて飯を食つたが風呂はない、營業所の事務や明日の準備を指圖してから室外に出る、十五日の月が皎々と冴えて、只時々遠く砦の音が聞える、馬小屋では出賣用の鱈馬が妙な聲で折々鳴く。

あゝ降りそゞく月光、旅愁につゝまれた月下の我れ、靜寂寥廓而も何等の雜音も聞えぬ此別天地。歸つて來て營業所の事務について話しが又出たが十時になつたので寢る事にした。薄い布団を敷いて紙の様な掛布団をかけたがまだ寒い。外套と首巻で肩を包んで眠る事にした、處が夜中になつて温突が馬鹿に暑くて少し汗ばんで來た。是で戸を開けたり閉めさせたりして夜明まで熟睡せずに終つた。

わか夢

川上喜久子

船あとの白き水脈よりほのかなれわが春の夜のゆめに入る路
君みれば夢に逢ふかとうたがひぬゆめは夜毎のならばしなれば
ありし日のわが夢こゝに残れりと思ふばかりになつかしき花
見忘れし夢のひとつをいみじくもとせざるごとしこのチウリツプ
はかなけれ夢のなかに逢ひつれどそれも夢を見ると思ひぬ
わが見つる夢のなごりと思ふまではほのかなれども美しき雲
わだつみを見てひもすがらありければ夜も見るなり紺青の夢
君が聲虫のなく音にうちまじり亂れがちなる夢なりしかな
相見つゝ何を言ひけんさめしあとといとさびしき短夜のゆめ
朝の霧ほのかにうすれわが見つる夢の名残もきえゆけるかな
春の朝ゆめにつゞけるきぬすれのやさしき音もなまめかしけれ
君來るを見つゝ思ひぬ今朝きえし残りの夢はこゝにつゞける
なやましき心とはなりうたゝねのゆめにもゆめを重ねけるかな
わが袂しめりてありぬ君へゆくゆめの路にも露のおきけん

翌日面事務所所在地迄一里の處を歩いて普通學校に行つた。

去毛里は此の外に十五六戸しかない淋しい度だ、只聳え立つてゐるのは學校の屋根丈だけだ、蠶草家の小部落に聳と立てる學校の壮大さよ。

我々本年女學校も改築した、小學校も一部改築の決議をした。而もそれらは仁川の町に比しては餘りにも輪奐の美を備へてゐるかも知れぬ、が今此の小部落の中に立てる普通學校を眺めては教育論はさて置いて何とはなしに調和がとれぬ様に思はれてならぬ。

十時の集會が十二時に始つた、

花月や銀水の宴會がいつも二時間宛つゝ遅れるのに比較すれば余り彼等の遅參を攻めるのは酷であらう、然し如何に此の待つ間の長かつた事よ。

閉會を告げたのが五時、一里半の道を歸つて來て營業所の暑い温突の中に自分を見出したのは六時半頃であつた。

朝鮮飯が食べられぬ自分は、朝も壽起焼、晝も壽起焼、かくして食事をするごと五回壽起焼をつゝくこと五回、而も隊の一點張！翌朝十時疲れた足を踏みしめながら素砂に著いたのは午後四時頃であつた。

内地をめぐる

飯泉幹太

大阪より

東萊で静養したので、元氣頓に恢復し、九日から本日まで舊友を訪ね、名所を見物して居ります。

朝鮮の春も、捨てたものでありませんが、雨中春色を探りつゝ、保津川下りの快味は、到底内地ならでは得られません。

大阪の股賑と京都の古雅と相反する所を悠遊するの興味は、自由なる身で初めて出来ます。

(三月十四日)

名古屋より

親戚、舊友を訪ね、わけて亡き妻の親友で、四十五歳で初めて結婚せし方と四方山の話を行いましたのは、一番愉快でした。

明日は上諏訪に一泊、製糸工場を見、又三十年前宿泊せし旅館の現状を見る筈。

當市は大阪の如き活氣の認むべきなきも、而かも落付あり、勤儉の風全市に横溢し、其の富力の全國に冠絶せるものありと聞く。

○ 十五日夕、久方振りに三階で相當の地震に遭ひました。十六日朝は、桃花の咲き初めたとい

ふのに降雪、内地は朝鮮よりか呑氣であります。毎日三四十枚の繪端書を書くのは、仲々骨でまた樂みです(三月十六日朝、名古屋志那忠旅館にて)

上諏訪より

木曾の清き奔湍に直面して、鬱蒼たる檜林の亭々と密生せる絶景、三十餘年前曾遊當時と變らざるも、水力電氣の各所に起れる唯驚くの外なし。

義經袴に身を堅めて、一種良調を帯びた懸け聲で、木曾材を取扱ふ様、古代を偲ばしむるものあり。

寢覺の床、何時見ても氣持よし。

降雪のため御嶽山を拜し得ざるは残念。

○ 三十餘年前、二十五歳で宿泊せし牡丹屋に宿泊せんとせしに、今は町の中央で眺望なく好奇心も何時か失せて、此のホテルに泊る。湖に臨み遠く富田の清姿を拜し、懷舊感殊に深し。

(三月十六日午後十一時半信州上諏訪布半ホテル別荘にて)

信州の製糸工場を視んと此の地に來りしも、其の中心は、今は岡谷にあり、時間の都合

(二八)

によつて、見るを得ざりしは残念なり。

東京から

東京は雨と雪で泥海の如く、其出入の不便此上なし。議會を見物したらと勸める方がありますが、マサカ車夫馬丁の喧嘩見たいな所を見る氣になりません。何處も見物しませんので未だ通信の種を獲ません。(三月二十一日東京郊外にて)

宇都宮から

六年間他念なく一生懸命病夫を看護せる長女を慰め勵ます積りで來たが、其の元氣な何等の不平、不安なく一身の愛を捧げて満足せる様を見て、私は實に心に鞭たれました、泣きました。勵まされました。

○ 惜しき友大塚常三郎氏を亡くしまして私はホントウに泣きました。私は二十日に見舞ひました、意識鮮明の最後でした。醫師は其前日に恢復の困難なるを告げました。君が私の來るのを待つて居ると云つて案内されました。堅く手を握つて離しませんでした。いろ／＼物語りしました。私は泣きました。而して君は翌曉逝されました(三月二十七日、宇都宮に於て)

松島から

何日來て見ても矢張り松島は三景の一です。わけて今日は内地に珍らしい好天で一層よく見へました(三月廿九日、壺釜ホテルにて)

子が秘藏の碁石

橋本豊太郎

此間不圖京城雜筆社を訪ふた處が、座に永樂町人兄と清溪君（本願寺）とが將棋の對局中であつた好きな道とて早速傍から拜見したが、其の手合は四枚はついで兩桂と云ふ取組に驚いた。次に僕が代つて清溪君に挑戦を試みたが結局負けたので、慙々松本先生の豪いのに敬服した。時に先生は僕に碁の方面について何か執筆せよとのことであつたが、京城の碁界には齊々たる多士で僕の如き此の間御旗頭たる分際として碁の話をするのには甚だ囁詞がましい様だが、其處は古つわ者に免じて宥してもらいたのである。

僕は四十年來石を握つて居るが其内明治三十七八年の頃に少しく碁に就て感じた事があるからそれを述懐したいのだ。當時日露戦争の際で僕は外務省の最も激忙なる所に勤めて居つた、晝夜の區別もなければ日曜大祭日の休暇もない併し執務時間（午後四時）が過ぎれば直に碁盤を出し掛ける、其の相手には今の佛獨駐劄大使の石井本多兩氏なども居つた、又山座政務局長も碁好きで時々重要な書類を手にしたが餘り見取れて、大臣の退出を忘れられた事が度々あつた。此の多忙の中でも十日目位には休が出たが普通の休日でない爲めに友達を訪ぬる譯に行かなか

つた。偶々當時樞密顧問官子爵野村靖といふ良い碁の相手を見出した。時々先方からの電話もあつたが、此方よりの挑戦に一度も拒まれた事はない、そして朝から夜の深更まで打ち續ける事は珍らしくなかつた、何時も御馳走して可愛がつて貰つたので僕は子爵に慣れくしく御叔父サンと呼ぶことにして居つた。其手馴は僕が常先といふ格であつたが、少壯の元氣を以て悪戰苦闘の後起死回生の術を施すので、お叔父サンは屢々くやしがられたが、一日僕に諭して言はるゝには、貴公は碁品を心得ない様だがそれではいかぬ……お叔父サンは僕に負かされて怒られたかなと思つたが併し僕は眞面目になつて……碁品とは何ですかと恭しく尋ねると、全體碁は單に勝敗を争ふものではない。其の局面には全人格が現はるゝから極めて慎重に石を下し苟くも品性を汚すことの無い様に心懸けねばならぬ。夫には碁法を學ぶの必要があるとの忠言であつた。小生は即座に答へて分りました……と陳謝しそれから廣瀬五段（目下七段）の下に教授を受けること數回にして子爵の門を叩き、對局を試みたりしに子爵の言はるゝには……オヤ貴公の碁風が變つた様だ、何處かで稽古して來た？。ハイ廣瀬五段の處へ參りました……ウーン一寸碁品が

直つた。宜しいとの賞辭を得て慙々對局を重ねると、お叔父サン又タヂくせられるのを見た時はホントに嬉しかつた。或時又訪問すると座に碁客あり見れば元外務省の同僚たりし内垣五段にして僕思はず叫んでトウく先生を御招聘になりましたなど哄笑した事があつた。斯くて日露戦争の終局と共に一年有半の好敵手たりし子爵との對局を收めて僕は韓國京城日本領事館に赴任することゝなつたが其際子爵より余に饒せられたる美事の碁石は今尚ほ珍藏して子爵の碁品に對する忠言と共に永く之を記念に保存する次第である。

うわさ雜記

平田 久雄

◎山口太兵衛氏といふと、年とつた人には珍らしく、朝寝ッ坊で大底起きるのは、九時か十時らしい。

◎話は大變好きで、どんな多忙な時でも、興に乗ると、仲々客をはなさない。

◎離さないのはいゝが、氏は端然と正座してゐるので、マサカ若いものが安座をかく譯には行かず一苦勞である。

◎話は非常に上手で、順序も立ち記憶もたしか、殊に言責を重んじ、この事柄は仁川の何某が詳しい手紙で聞き合せるまで待つてくれ——それほど山口氏は、誠實律義の美しい一面を持つた人である。

◎本來好人物だが、新聞雜誌社員といふと、何がなしに敬遠主義と出かけるのは、中村再造氏である。しかし再造氏を茲に至らしめたのは、そもく誰の罪？。記者は寧ろ再造氏に同情したい。

書

佐々木正太

書とは何ぞや。と問はれて、それは繪だと答へる事も出来るが、少しも問題の解釋にはならない。書とは、胸中の文を、表面に現はしたもので、點と線とより成る。即ち、自己心中の文を點線で、表面に描出したものである。この意味からいふと、書も亦胸中の文を、點線で表示したものである。元來書と書は一致すべきものであつて、古人は書のことを心書と謂つた。殊に、眞正なる文字は唯、篆ばかりであつて、而かもそれは、原則として象形に出たものだ。象形は全く書である。隸を始めとして、眞行草は篆を變化したに外ならない。此等の諸體は、眞正なる文字から遠ざかつてゐることが、甚だしいわけだ。と云つて何も隸書や眞行草の三體を蔑視するのではない。學問上から、さふ論評する迄である。

書は胸中の文であるから、文でなければ書にならない。そふすると、此度は文とは何ぞやといふ問題が生ずる。茲に文といふのは、武に對する文、野に對する文、のやふに制限された意義ではない。総て心の線を意味する。武にも野にも線はあり得る。しかし、人心に感ずることの総てが、文に成るかといふに、そふはいけない。文といふからには、少なくとも雅味がなくてはならぬ。韵氣がなくてはならぬ。胸中の文は自己のものたるを要する。他人の文を表現しても、それは書といふ程のものではない。たとへば、倣でも、それに自我が幾許か加はつてゐれば、正しく自己のものに相違ない。たとへば、臨摸は書に成るが、數き寫しは、書としての生命は

ない。其の本領はどふしても、自我の表現でなくてはならない。此の意義に於て、寫眞は書といふことが出来ぬ。しかし、一度攝影したものに、自己の文を加味すると、それが書に成るのだ。例のスケッチは、自然を臨摸するのであつて、正しく書といふべきである。自然と同一のものを、スケッチすることは、人力の企及し得べからざるころであると同時に、スケッチしながら、それに識らず、自我が潜入するのである。これは序だから一言して置くが、書も書も自己胸中の文を表現するものであるから、此れを外面に寫し出すときの、自我の心的状態は實に至大なる關係を及ぼすのである。描寫の手段方法も、重要視すべきであるが、其時の心の持ち方如何が、最も重要な點である。文の品質技能の巧拙は暫く措いて、自我が其の宜を得ない状況にあると、どんなに苦心しても、どんなに努力しても、其の作物は決して十分なものでない。自我を適當の状況に在らしむるのは、何事をするにも、望ましひことだが、書と書を作爲する場合ほど、それが直面的に結果に現はれるものは、餘り他にあるまいと思ふ。自我を十分に維持するため、いろいろの工夫を用ひる人もある。或は手を著けるに當つて、姿勢を正し一度十二分に腕を伸してみるとか、或は適宜に酒などを飲んで、快心の状態を用意するとか、或は氣を引立てるために、豫め散步をしたり運動をしたり深呼吸をしたりするとか、或は傍觀する者を追つ拂ふとか、其の反對に傍觀者を招き寄せるとか、そのほか、特殊の場合だと、齊戒沐浴をしたり、或は前以て不淨を慎しむとか種々様々な、やりかたがある。如何なる畫伯でも、又如何なる書家でも、同じく人間である以上、やはり同様であつて、たとへば其の相違は程度に止まる。此の理は、総ての手藝に通ずる。象刻も其の例に漏れない。尚ほ序に一步を進むると、此點に關して、實は一つの大きな問題が、横たわつてゐる。それは、作者の境遇、就中

其の生活が安定してゐるか、どふかが最も大切なる關係をもつてゐる。尤もこれは考へ物で、生活が至つて呑氣だと、たゞ趣味からの欲求ばかりに止まるから、自己を鞭撻する力が乏しい所謂張り合が少ない。面到我いと、ウツチャツテ仕舞ふ。さればと謂つて、食ふに困るやふでは、實際やり切れない。昔は、風雲流水で、やつて行けたが、今は、そふも出来ないやふに思ふ。それで、呑氣な暮しとは云へないが、サツサと勉強すれば、どふかこふか立つて行けるやふなのが、極めて理想的である。道樂にやつても、或程度は成功するが、到底本物には成れない。若し、道樂で成功したものがあつたといふなら、それは道樂ばかりでやつたのではない。少なくも、過半の力を其處に傾注したに相違ない。

畫は、表面に現はすことが必要である。胸中に描いても、畫には成らない。現はすのは、表面であるから、必らずしも、平面たるを要しない。凹凸があつても差支へない。また必ずしも布と紙とに限つたことはない。石の上でも、木の上でもよろしい。金や土でもかわりはない。昔は、紙もなければ、絹もなかつた。それでも立派な畫が描けて、其の面影は、今でも見ることが出来る。表面は凸凹があつても差支へないと謂つたが、彫刻のやふに、立體的表現をするものは畫でない。私が畫を定義して、點と線とを以て、描出したものと申すのは、全く之れがためである。點線二つで、立體を書くのは、何でもないが、之れを立體的に表示することは絶対に不可能であると同時に、立體的表示に依らないで、立體に見せることが出来るのを、畫の特徴とする。點と線とを嚴格に用ひて、描くのが所謂勾勒法である。勾勒法は、點と線と骨肉俱に備はる畫を、作る事が出来る而已ならず、實に畫道の眞髓を成すものである。繪具は作畫に缺ぐべからざるものゝ様に成つてゐるが是非とも必要はない。筆紙墨の三つでどんな畫でも描ける。繪具は、餘計なものだとも云へる

殊に、東洋畫の精華は、水墨に依つて現はれる繪具を使ふのは、實物に近似せんがためである。或は素人を嚇さんがためである。或は又、無智の徒輩に嚙こばれんがためである。さりながら私は繪具を使つた一切の畫を、排斥するのではない。繪具を巧に使つた畫は、往々にして水墨を凌駕する事もある。しかし、それは稀である眞に極めて稀である。東洋畫の奥儀では、實物の色彩を等閑に附すと、きまつてゐる譯でもないが、イヤに怪しひ色で、ベチャ／＼落り付けるのは、どふしたのか、少くも嘔吐を催さしめない程度に止めて置かない。東洋畫の展覽會だといふので、わざ／＼往つて見ると、豈計らんや、西洋畫とも見へず、また東洋畫ともツカないものが、雜然として掛つてゐる。氣韻とか韻氣とか、丸で何時の間にか、棄てられたも同様の感が浮ぶ。就中、ウスボンヤリで曖昧な、正體を認めかねるやふながあるには、實際變らされる。私は、此等の所謂東洋畫を觀て、自分で自分の眼を疑ふことが屢々ある。此れ等の作者は、いづれ相當の研究を積み、また相當の努力を惜しまなかつた人々だろふのに、如何なる信念、如何なる根據、如何なる理想を擁してかゝる舉に出たのである歟。東洋畫は、自我胸中の文でなくてはならない點から考へると、此れ等、作者の胸中には、表面に現はれ出てゐるやふな文が、實在してゐるに相違ない。即ち、エタイのわからないものが、存在してゐることが明白である。此れ等有爲の作家は、取りも直さず、混沌たる過渡時代の犧牲者である。東洋畫が、東洋畫を統一するか、將た又西洋畫が東洋畫を同化するか、統一や同化が、可能性を帯びてゐるか、どふか、と云ふ問題は、恰かも東西文明論に於けると同じく、方に斷案を要する時期に達著してゐる。

東洋畫に對する西洋畫は、恰かも漢字に對するアルハベットの語のやふなものである。アルハベットの語を構成する、個々のアルハベットの文

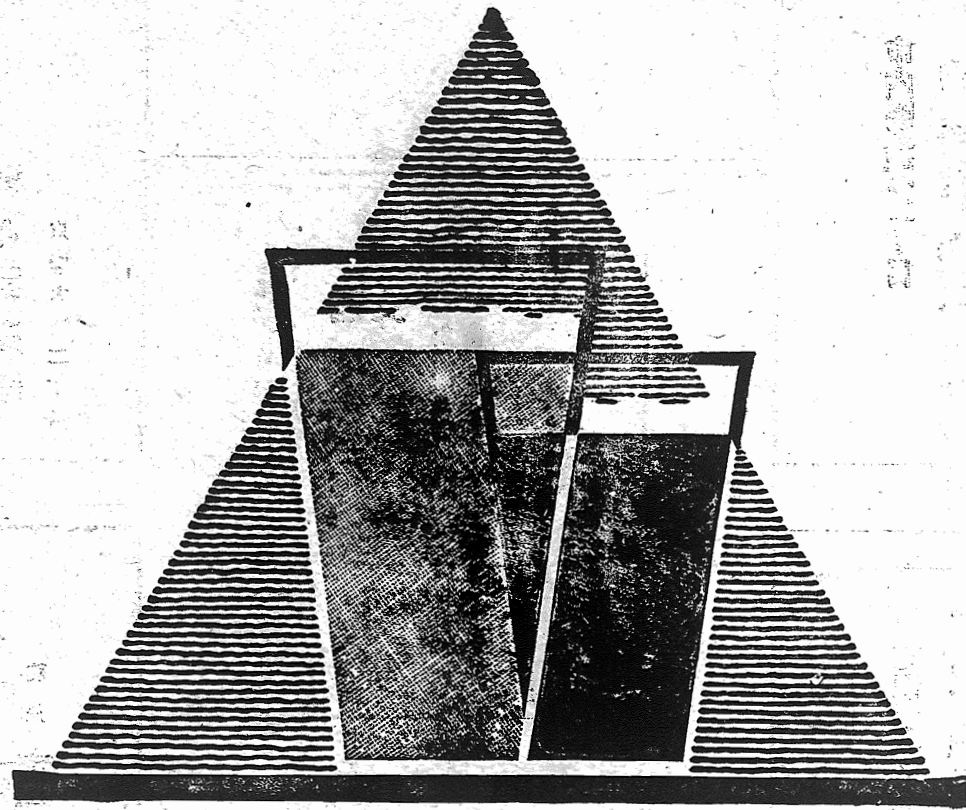
春風

尾崎敬義

人よ老いた銀の鞍おき白き馬に鞭をあ
てなん春風吹けば
心臓に火酒をそそぎて寂光の世界を見
たり初春のゆめ
浪々の身こそめでたし天地は悠々とし
て春風吹くに
舞姫のおどるすがたに曲線のゆたかな
る美をめづる春宵
二月盡平等院の夕かぜに紅梅も散る運
翹もちる
洛陽をいづる夜汽車の食堂に支那の女
の美しき眉(支那)
御所車に似たる車を曳く馬の春に嘶く
洛陽の町(支那)
いつまでもあつき血汐のありやなしや
我が青春の夢はなつかし
夜をこめて雪洞ともす離の間に寂しき
春の雨をきくかな
原宿に春はおくれて赤阪は淡く春めく
夢のごとき町
傘さして牡丹をきりぬらす紅の花瓣に
重き玉雫かな
とにかくに青葉のころはいとうれし我
が誕生の五月は戀し
ふと思ふ十とせのむかし美しき繪卷の
中の戀の一ふし
浪々の身をなりてこそ人間の心をしか
ととらへぬわれは

字は、漢字の根源たる古篆即ち象形文字と同じ
様なものであつて、其起源が、いづれもサンス
クリットに發してあるかどふかは兎も角も、其
性質と其形態とが、著しく相似てゐる。頂度そ
のやふに、東洋畫も西洋畫も、ズット昔は、別
に差別すべき點がない。埃及や印度の古畫を見
たら、誰も、さふ思ふだろふ。殊に、上古の壁
畫は、實に酷似してゐる。しかるに、今日漢字
とアルハベット語を統一することが出來得るだ
ろふか、どふか。とても、出來る相談ではある
まい。それと同じく、今日東洋畫と西洋畫を統
一することは、先づ不可能だと申さねばならな
い。東洋には、東洋固有の畫が發達し進歩し大
成した。西洋にも、西洋固有の畫が出來上り又
進化してゐる。其の経路は、恰かも文字の變化
に髣髴たるものがある。洋畫を稽古するのは頂
度外國語を習つてゐるやふなものだ。洋畫なら
洋畫でやるがよい。東洋人だつて、洋畫が描け
ない道理はない。之れと同時に、東洋畫を描く
なり、何處迄も東洋畫で押し通さなければなら
ない。洋畫に似たやふな東洋畫を描いた人は、
以前にもないではない。司馬江漢も、其の一人
であつた。之れを見ると、チヨット目先がかわ
るので、物珍らしひ氣も浮ぶが、暫くすると嫌
になる。東洋畫は墨色を以て其の特徴を發揮す
る。墨色のない東洋畫は、取るに足らぬ。繪具
ばかりで描いた畫は東洋畫の眞髓を傳ふこと
が出来ない。繪具は墨色を現はし得ない人の用
ひる材料である。假に一步を譲るも繪具は、墨
色を補ふための便法であり方便である。近世に
成つて、東洋畫を吳服店で取扱ふことが流行し
出した。吳服店は東洋畫を著物の柄に見立て、
ゐる。そこで作家も店の氣に入るやふに、繪模
樣を主とする。觀客も柄を選ぶやふな按配で畫
に對する。衣類や器具道具の繪柄も、決して馬
鹿にはならない。よい繪柄を描けば、千金にも
値するだろふ。けれども、東洋畫の本質は自己
胸中の文であり、水墨は之を表現する無二の方
法たるを顧みたら思ひ半に過ぐるであらふ。

キリンビール



キリンビール

株式會社 明治屋 發賣

茶と茶器と
は青々園へ
青々園茶舗
京城本町二丁目

市内永樂町二丁目
木戸齒科醫院
院長 木戸 虎藏

西洋料理
支那料理
東京芝區新櫻田町一七
泰明軒
東へお出での節はどうぞお立寄りください

市内明治町二丁目
小兒科 中島病院
院長 中島 貞信

市内明治町二ノ七五
利根川齒科醫院
院長 利根川 清治郎

市内旭丁二丁目

外科
皮膚科
瀨戸病院

院長 瀨戸 潔

市内鐘路二丁目

濱洋服店

電話光化門二四四

人生の幸福は健康より

健康それは參精の服用によつて解決します明日と云わず今日から而して人生の幸に向つて

(定價内用二十五瓦入壹圓五十錢)

京城本町二丁目

監督府參
精發賣元

貴生堂藥品店

電話本局一三八
振替京城七六一

高級
京 洙

(新柄見本到着)

京城本町三丁目

まらぎ屋

電話本三〇六八
振京五八三

市内吉野町二丁目

小兒科
木村醫院

電話本局七二五

既製品が澤山あります

春向背廣服
バーオ
トーコンイレ

新地質續々到着
いたしました
仕立は念入り價格
は安い

京城鍾路一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番
振替京城一八四三番

御注文で特製致します

洋傘直しと英雄

見目徳太

○彼は三年ばかり前の話である。其頃は東京の郊外で代々木の中山谷と云ふ所に住まつて居た。此の邊は明治神宮のそばで裏參道に沿つて居り、高燥にして中々良い土地柄である……と自分は今でも思つて居る。

○忘れることの出来ない九月一日の大震災直後の事であるが、震災地一帯は殆んど無警察の状態に陥つて居つて各自は自身で生命財産を守るの外無いと考へられて居る場合である。我が中山谷でも所謂自警團なものが組織され各戸から一人づゝ出て晝夜の別なく附近一帯を警戒して居た譯である。

○自警團には一統を指揮すべき團長が必要である、半ば衆望を擔ひ半ば自馬的に團長となつたのが私の居た家から一町計り先の洋傘直しである。

○彼れ洋傘直しはふだんは餘りつき合もしない所謂プロ級の男で、妻君と近所の悪太郎で通つて居る男の子と三人で長屋の一隅に按摩と隣り合せて住まつて居た。四十四五の眼光殊の外鋭い兎に角一癖ありそな男で、平生から私は此の男の前半生には何か暗い影がありはしないかと思つて居た。

○中山谷には相當知識階級が澤山住んで居る、特に豫備後備の少將や中將が可なり多く住まつて居るから、團長には是等の閣下連中がなつて然るべきであるのに、計らざりき彼れ洋傘直しが飛び出して來て大將になり我等の牛耳を執つたのである。

○初の内は何か洋傘直しと心では皆馬鹿にして居たが、彼には相當膽力もある然も中々の智者で團長として日に日に重きをなして來る、然し十日許りで軍隊で整備されるようになったのである。

○話は是丈けであるが私はこんな事を想像して見た事がある、假りにあの際秩序が中々に恢復せないうで自警團も其の儘繼續されたとしたら彼れ洋傘直しは勢ひ權力が加はつて來て名實共に中山谷の大將になりはせなかつたか、こう考へると何だか恐ろしさを覚えて來る、國亂れて英雄現はるとはこんな事かしらと今でも時々思ひ出すことがある。

妓生と小林君

鉦鹿 曉太郎

此種職業婦人の通有だそりですが、さりとはい餘り甚しいものですから色々と聞いて見たのです、すると『よく賣れるけれども借金の利子に迫はれて貧乏を續けて居る、一人妓生を抱えると儲かるけれども之れは二百圓を要する』と云ふのです。

『其後兩三回の訪問によつて飲食を共にする機會を持ち且つ同じ話を數度聞かされて居る内に僕は此の二百圓を調達してやらうと思つたのです。家内にも相談しましたが『夫れ程同情するなら貸しておやんなさい』と云ふのですから十圓札で二十枚懷に忍ばせて狭い露路を温突の煙にむせながら濕ッぽい藩板を踏んで彼の女の内房に現はれた僕の姿を想像して下さい。随分間拔けたものでしやうが、其の實僕は眞剣でしたよ。

『相手が花骨牌をしようと思ふ、僕は知らないけれども六百ケンと云ふやつをやりました』
『先方の要求で賭けをしましたよ、妓生が勝てば如何なる要求も聽く、こちらが勝てば妓生の體面を自由にすると云ふのですよ。そして先方が勝つたから『何なりと君の望みを云ひたまへ』とやりました。此邊で二百圓が飛び出すこと、心待ちにして居つたけれども案に相違で、『別に望みも頼みもありません。戯談です』とあつさりによられたのです。僕の妓生に對する敬意と信頼は此時を以て『クライマックス』に達したのです。
『次の機會にも亦賭をやりま

『本當の話をしませうか、僕が妓生を買ふたのですよ、夫れは今年の春まだ淺き二月の或る寒い晩でした、紅燈の下綠酒ではなく温突の中『ケウソク』に凭れて友人と二人平常餘り手にせぬ盃を擧げたり下ろしたり、大した話も無いんですがね、頬が斬くホテツて來ると多少からかつても見なくなりましたね』

『朝鮮の女は何か無いそらだね、エ、あのそれあるべき處に何が、僕は腕曲にやる積りのを友人が早速直譯して了つたのですな、すると彼の女は開き直つて『ありますとも見せてあげませうか』と來たんです、事茲に至る『それには及ばぬ』と云ふ譯に行きませんやね『よろしい見せて貰ふぢやないか』ツツ立つた彼の女は胸のあたりに結ばれて居る下衣の紐の悉くを解いて之を兩手の指に支へ、しばしためらつて居ること恰も一打の合圖にかけられたる芝居の場幕か、斧の一撃を待つ漕水船の緊索のその如く、此時僕の胸はときめきました、まさか、と思つてね、緊張した場面は急に展開しました。ワン、ツー、スリーの懸聲もろ共、パツと引

き下げたる兩の腕の間白き膚もあらはに見事……。

『破顔一笑と云ふ處でしやうが、僕は顔が硬はつた様で、エ、無論ありましたよ、楚々たる此少女、餘りの事に歳を聞くと十九歳、本當かと云ふと鐘札を出す。明治四十一年×月生、あばづれる歳ではありませんからね、何度も詫びようかと思ひましたよ』

『歸る途すがらも考へましたね、すまぬことをしたと云ふ心持で一パイでした、氣になつて寢られないのです。可憐の女性、職業婦人と雖も裏若き此佳人、鮮人にはあるべき處に……無い杯と云ふて彼の女の敵愾心をあほり如斯行動を敢てせしめた、何とも申譯が無い。恰度二晩自責の念で眼を爲さなかつたのです。遂に意を決して彼の女の寓居を訪ふたのは翌々日の夕方でした。快く招き入れて呉れました。僕は素直に告白をやりました、正直な人と思つたのでしやうね非常に款待しました』
『併し室内の調度其の身邊の状況から察するとかなり貧困らしいのです、外部にミエを飾つて内部に火の車を廻す事は特に

した、此の時は僕が勝つたので

の口約を不安かり寺々多きす旨

した、此の時は僕が勝つたので
す。妓生は用便に托して其の母
を外せしめ門扉に掛金を内
部からかけ、そして僕の隣下に
突つ伏して『御自由にな……』、
どうです此邊で話を止めませう
か。あとは貴下の御想像に委し
て……エ、序でに話せと云ふの
ですか、ぢや話させよう、僕が
どうしたかと思ひます……處が
僕は清く飾つて了ひましたね。
嘘だと云ふのは貴下が不純なの
です。僕は云ひました『此前君
が勝つた時君は何にも要求しな
かつた、僕のみが君の身柄を自
由にする譯には行くまい』とな
る。

の口約を不安がり時を移さず指
輪を面前に並べた其心行きには
イヤな處があるではありません
か。彼の女に對する盲目的敬愛
に動搖を感ぜざるを得ません、
十二圓のものを一個買ふことに
して僕の出した十五圓に對して
は三圓の剩錢を寄越し縁側に待
たした商人には十圓札を叩きつ
けて二個の指輪を引つたくつて
來た見暮と其のズルキ腫は曾て
見出し得なかつたものです』
『其の夜旗亭に伴ふて酒を置
きました、此方はお別れの積り
ですが先方はハメを外して飲ん
で居りました』芝居が上手か、
見物の自己陶醉か』笑つて下
さい此の變り者を』『二百圓は
無事なるを得ました』『正直な
る心が不正直なる心を征服した
と思つて満足しますすかね』と小
林君の長話……聞いた儘を。

◆東西南北集

平田久雄

○ 京城婦人病院の工藤さん、詩
書、畫といふ三ツの道樂の外
に、まだ茶道といふのがある。
それも頗る徹底したもので、夜
中に眼が覺めると、何時であら
うと、スツクと起き出で、湯
を沸かし苦茗を煮る。時々夫人
から泥棒潜入と間違へられて、
『まあ、あなたですか……』。

○ 工藤さんの文品は定評がある
が、夫人は一向振向かない。
『たまには俺のも讀んでくれ』
といふと、夫人『あなたのものい
ふですけれど、理窟ッぽくッて
ね』工藤さん頭があがらない。

○ 下に掲げるのが、工藤さんの
近作、尤もよく作者を代表して
ゐるが、願くば夫人の酷評を聞
きたいもんだ。
昆原々上家蛙喧、赤白痴論世
俗煩、別有逸民甜禿筆、悠々
案句負春暄。

○ 穀物信託の淵木さん、熊本
出身で、少年時代は徳富蘇峰氏
の嚴君淇水翁に就て、學を修め
た。例の蘆花氏が同年輩で、い
たづらをやつては一所にお目玉
を喰つてゐた。十九の時東京に
出たが、その前後は盛んに苦學
したもので『君、これでも二年
間も魚屋の天ピン棒を擔いだこ
とがあるからネ』淵木さん、こ
の話になると感慨無量の態。

鯉と蜘蛛

- 鯉の跳ねるのは降雨の兆。
- 蜘蛛が頻に網を張り始めるのは晴れる豫告。
- 唐黍の根の高いのは、秋に暴風のある知らせ。
- 蜂が物陰に巢をかけた年は大風がある。
- 蟻が穴を築くのは大雨の兆。
- 朝鳶には義を着よ、夕鳶には笠を脱げ。
- 宵の鼻雨晷。夜の明晷日晷。
- 馬が嘶くと天氣になる。
- 牛が吼えたと空が曇り風が吹く。
- 蟻が多くゆきかふのは大風の兆。
- 鳶が川の上で舞へば晴、鳶の鳴くのは雨。
- 魚の多く泳ぎ出るのは雨の近い兆である。

眞の雜筆

渡 邊 晋

[80]

塵の世

海軍兵が陸軍の兵營を參觀して君等の室は空氣が良くて羨しいと陸兵に述懐した。一寸不思議に考えられるが、軍艦の甲板上の空氣は純良無比だが船内は換氣がよくない、殊に水兵室の空氣は不良であらう。

私は多に別府海岸の旅館に泊つた。三方源、三方榎側、総硝子戸一寸理想的に考えられるが、硝子戸中の幾十の部屋、之を掃除するに遂に一度も外の硝子戸を開けて換氣した事がない。

硝子一枚外は憧憬の別府の海中は塵の世、蓋し逃げ出す外に方法は無かつた。

環境の利用

昨冬から學校の冬休が長くなつた、小供達を別府に送る、終日海濱で遊び、京城には歸りたくないと言ふ。京城に歸つてスケートを與へて昌壽苑の池に放す、こんな面白いことはない、此の冬からは別府には行かぬと申す。

朝鮮海峡

關釜連絡船で四月の海を渡る、青い空、青い海、暖かい春光、人間界の極樂である。私は全航程の八時間を甲板で暮らした。幾百の

乗客は如何と顧みる、皆船室に寝轉んで居て、甲板に上つて來る者は全航程中二人に過ぎない。何故?と考へて見る。

乗客の大多數は内地人であるが四月の船の甲板には和服では寒いのであらうか、然らば日本服は不完全と云はねばならぬ。旅ぼういものと具縮して居るか、夫れでは進取活躍の我が國是に反する。清い空氣、日光の恩恵を利用するに怠慢であるか、夫れならば大に衛生思想の開發を要する。投身者と疑はるゝのがいやか、吾々は今少し快活無邪氣であらねばならぬと思ふ。船に墜いと云ふのか、口を開けば四面環海の海國男子と云ふくせに!此の見事な連絡船、昔し神功皇后はどんな御船で此の海を御渡りになつたと思ふ。何の點からも辯護の餘地はないと獨り甲板のベンチで稿を綴る。

薬 水

朝鮮では薬水と稱する谷間の湧水を向んで、治病等の目的で飲用者が市を爲して集る。果して特殊の治病効力があるかは研究ものであるが、幾百年間土中不潔物が淫浸して井水に増分、有機物の多い市街地の住民が薬水の清冽を喜ぶのは當然である。只泉に何等の施設がない爲めに折用清冽の泉が多

人數の手や口や容器の爲めに汚がされる、殊に傳染病流行季節には危険で口にするに堪えぬ。何等かの設備をして欲しい、湧出量が少ければ現在の薬水に限るに及ばぬ、京城四週山間谷谷の比較的湧出量の多い泉に多少の設備を加へて湧き口に直接に口や掌の届かぬ様、又壺に受けて持ち歸る事の出來る様に特殊の湧出水管を作つたらばよからう。實生活の利便の點からも、朝鮮古風尊軍の點からも暖かい仕事であると思ふ。

掃 除 風

三月の下旬から京城は風の季節に入り、西の烈風が日々吹きつゞく、黄金町一丁目を歩く、風の吹き起りの一丁目は微塵一片すらも残らぬ様に吹き飛ばして、風下の風塵には氣の毒であるが一丁目丈には誠に清淨無比、自動車が疾走しても土煙も立たぬ、常々不充分と感じて居る舗装道路の掃除の御手本を見せつけられる氣がする。

祝 辭

女の子の學校の卒業式に行つて見る、祝辭の数も多いが、皆何れも「諸子多年螢雪の功を積み……夙夜勉勵攻々として倦まず……本日を下して……諸子夫れ之を努めよ……」と云ふ風である。

ニールワマー

冬の洋服、膝が寒い、猿股の下端から靴下の上端までが手薄である、ズボン下を二枚重ねる人もあるが窮屈である、其處をニールワマーが暖めて呉れる、毛糸のゴム編み、平假名の「く」の字に造る

其の會議の議長に推されて居つた

間界の極樂である。私は全航程の八時間を甲板で暮らした。幾百の

のは當然である。只身は何等の旅設がない爲めに折角清冽の泉が多

編み、平假名の『く』の字に造る

秀蘭遺稿

徳野眞士

其の會議の議長に推されて居つた夫人が社會的に活動するのはこれからだと思つて居たのに、誠に惜しい事をしたものである。

× 昨年の三月、私は恩人秀蘭女史安田靖子夫人（初めの名は麗子）の訃報に接して、その告別式に参列すべく取るものもとり敢へず大阪に行つた。私は下關大田間の列車内で告別の辭を草し、大阪に着いてから、普斷私が使用して居る名人の便箋に、ペンを以て之れを清書し、全く從來の因襲も形式も無視して、宛然生ける人に與ふる書信の體裁にした『お別れの詞』を阿部野の齋場で朗讀した。

× 眞剣で、精神一到何事か成らざらむと云ふ氣概があつた。こんな自己内面の充實に不斷の努力を續けられた婦人は、私共の曾て見ぬ處である。

× 死者に對する禮としては、奉書に水筆で黒書すべきであらうが、私はよく夫人の平生を知つて居るから、死者の禮を盡くすよりも生ける親しみを以てお別れする方を却つてお喜びになると考へたので敢て此形式を撰んだのである。

× それも世間の女のやうに、美容院に通ふ事や、子供のお守り位が全部の仕事であるならば、或は心掛け一つでは夫人の半分位の修養は出来るかも知れぬが、夫人は實に人一倍に働いて、四人の子女の母として誠に申分なき教育の任を盡くし、自分の生父母と婚家の父母に對して孝養を怠らず、且つ良人の任地到る處で必ず女子教育家として教壇上の人となつて居る。

× 夫人は良人安田禎之氏の任に従つて、鎮南浦や京城にも居られた事があるので、今でも澤山の知人があるだらうと思ふが、全く當代では稀れに見るの賢夫人であつた。其の學識の如きも、堂々たる男子に比して毫も遜色はない、英語や數學に堪能であつたと同時に漢學にも造詣が深かつた。基督教の學校出身者でありながら、禪に參じて二十年近い修養を積まれ催眠術もやれば哲名學や象形文字の研究もやられた。何をしても頗る

× 鎮南浦時代でも京城時代でもそうであつたが、大阪でも學校から歸ると自宅で十數人の女生徒を教へて居つた。朝早くから夜遅くまで寸暇なきやうな生活状態であつたが、それでいつ書くのかいろいろな新聞雜誌に絶へず原稿を送り又大阪朝日新聞社の關西婦人聯合會にも關與して、一昨年の秋には

× 私は昨年、その夫人の遺稿整理を命ぜられて非常な光榮を感じつゝ、自己の魯鈍に鞭打て一生懸命に努力した。けれども却々思ふやうに仕事が進捗せず、半年以上何か頭を押へられて居るやうな思ひがして惱み暮らしたが、婦女新聞社長福島四郎氏の助力により此の四月一日附で、殆んど九百頁に近い大冊子が發行せられた時には、私の貧しい仕事に對しては、酬ひられた事が餘りにも多きに過ぐるやうな喜びを覺へた。

× 此の書は、安田家に於て記念のために出版したもので、夫人の隨筆感想録に過ぎぬが、家庭教育の參考書としては眞に得難い貴重なものである。夫人を知れると否とに不拘、世の教育家は勿論、一般家庭主婦並に子女の父たる人にも一讀していただきたいと思ふ。

× 此の書は、讀んで見て決して肩の凝るやうなものではない、聊か家庭の私事に亘る點もあり、私なども引き合ひに出されて居るが、それでも何かの御參考になると思ふ。若し夫れ雜筆にでも寄稿しやうと思ふ程の人は、夫人の書いたものを見ると、どんな些細なことでも文章のたねにはなるものだと

いふ感を抱くであらう。そうして文章が豊富な用語で、圓轉自在に自分の思ふ事は徹底的に表現しつくして居るから氣持がよい。『平易流暢得意の文章として當代の範』とするに足ると私は信ずる。

夢

松本光

死の家

この家を訪ねる人は屹度死ぬ。支關に一足入れたばかりでもう死んでゐる——そんな傳説のある家に私と兄と母と女中とで住んでゐる。私と兄とは一ばん奥の部屋に、母と女中とはその次の間に、四人とも黙りこくつて住んでゐる。父が歸るのを待つてゐるのだ。しかし、父ですら此家の敷居をまたげば、すぐ死んでしまはねばならない。だから歸つて来ては大變だ、と惧れてゐる。そのくせ、四人とも父の歸るのを待つてゐる。息をこらして待つてゐる……。

支關のベルが鳴る。『父だ』と立ちかけると、兄が黙つて首を振る。父ではなかつたのだ。又鳴る。ハツと立ちかける。兄が首を振る。——父でない訪客が二人死んだ。又ベルが鳴る。今度は兄が血相を變へて立ち上つた。隣の部屋でワツと泣聲がする。私は體がすくんでしまつて動けない。兄が歸つて来た。黙つて押入をあけて、眞赤な布團を敷く。そして黙つてその上に横になる。『何をするんだ』と私は驚いて尋ねた。

『死ぬんだ。この布團に寝れば死ぬんだ』兄が初めて口をきいた。

『なぜそんな布團を敷んだ』
『仕方がないんだよ』と云つたかと思ふと、兄はもう死んでゐた。私は急いで隣の部屋との襖をおつびらいた。母も女中も丸くうづくまつて、息が絶えてゐる。もう私ひとりだ。

私は兄がしたやうに押入をあけた。赤い布團を敷いた。その上にあふのけになつた。そして眸を閉ぢると、頬の上に氷のやうに冷い涙が一つこぼれた。

——目がさめて見ると、ほんとに涙が出てゐた。

女である

何だかみんなの様子がへんだと思つた。みんな私の顔を見て嘲けるやうに笑ふ。會社へゆくとき、ストロブの前に集つてゐた連中が、ひそ／＼と囁き交しては私の顔を見る。給仕に茶をたのみと、持つて来ない『威張つたつて駄目だよ』といふ眼をしてゐる。わかつた!! みんなは私を女だと思つてゐるのだ。男裝した女だと思つてゐるのだ。ゆふべの宴會で私一人裸にならなかつたからだ。急に淋しい氣が

した。又腹が立つた。よし!!、男の證據を見せてやらう。私はみんなの注視の中を立ち上つて便所へ行つた。窓越しに大勢の顔が覗いてゐる。いゝか。それ見る。

——危い所だつた。もう少しで變小便をする所だつた。

白秋の藏書

本町通を歩いてゐると、人が大勢立つてゐる。見ると、大阪屋號の書棚よりまだ大きい本箱が二つ並んで置いてあるのだ。中にはギツシリ本が詰つてゐる讀み度いい本ばかりだ。

『どうしたんだ?』
『賣物だ。北原白秋が藏書を全部賣るんだ。全部で十六圓だ。』

取し事には、私にはその十六圓がなかつた。私はすぐ駆け出した。誰かに借りて来よう、と思つて。

白山の通りをどん／＼走つてゆくと(私は京城から東京の小石川に来てゐた)昨年死んだ叔父に出會つた。叔父の金勘定はじれつたい程のろい。死んでから妙に吝になつた。十五圓ぢやいけないか、なんて云ふ。駄目だよ。十六圓なぐちや。と私は怒鳴つた。

札を握つて一生懸命に駆け戻つたら、アイ號、もう無いんだ。『誰が買った?』

『あの人が買ったんだ』
追っかけて行つて肩を叩いたら、知り合ひのMだつた。妻君と二人で小さい包を一つ宛掲げ

てゐる。あんなに澤山の本が、
どうしてこんな小さな包に變つ
たんだらう。

るんだつた。

『賣つておあげなさいよ』

と妻君がとりなして呉れる。

『俺に買はしてくれ』

『仕方がない、一包だけ買ら
う。八圓だ』

『ぢやア、十七圓出せ』

八圓だ』

しまつた。もう一圓借りて來

買つて見たら『大正一萬歌

集』が二冊切りだ。そしてそれ
は私の藏書だつた。

『ザマア見ろ』大勢の彌次馬
が、私をこついたり蹴つたりし
た。——利那に、私は國祭の書
を買はうとしてゐたのに氣が付
いた……。

X

切りがないからもうやめます
今度はもつと氣の利いた五臓の
疲れ方をすること。

~~~~~

### ◆聞くがまゝ

平田 久雄

◎不二興業の澤村さんには驚い  
てしまふ。過去十二年間を通じて  
全く無缺勤であるといふ。而かも  
朝は八時から、晩は電氣のつく迄  
愉快さうにやつてゐる。おまけに  
日曜でも、祭日でも一度は會社に  
出ないと、氣持が悪いといふんだ  
から堪らない。

◎恐ろしく研究心の強い人で、  
白米はよくない、さればといつて  
玄米のまゝも面白くないといふの  
で、自家で中白に米を搗いてゐる  
而かも閉があると『よし俺が搗い  
て見よう』

◎魚肉でも、野菜でも、それ自  
身が持つ持ち味を殺してしまつて  
はいかぬといふので、無暗に砂糖  
や味淋は使はぬことにしてゐる。  
だから澤村さん曰く『よく自宅で  
客をすると、味が違つてゐるので  
大底な人が箸を持つてヘンな顔を  
してゐます』と。

◎それであつて、この人ぐらゐ、  
人の世話をし、人のために財を使  
ひ、人のために後援盡力してゐる  
人も渺なからう。

## あかつき

高田 豊

晴れた朝の淺緑りの空に、茜色の曙光が射して、崇  
巖いはん方もなき光景を呈する早曉の壯觀は、如何に  
高朗な心持にまでわれ／＼を誘ふてくれることである  
か。さしのぼる朝日の如く勇しく、持たまほしきは心  
なりけりとほ、明治天皇の御製である。げに平原の中  
に住んで廣い地平線上にさしのぼつて來る朝日の光り  
を望み見るとき、われらは何とも名狀し難いやうな壯  
快の感に打たれる。昔賤貧富、そんなことは問題では  
ない、榮辱窮達、そんなことも問題ではない、たゞ斯  
うした崇巖な光景に對して、おのれ自身が生存してゐ  
るといふことを、意識するだけで溢れるやうなよろこ  
びに滿されるのだ。ほがらかなる早曉の天地の美がお  
のつからなる幸福感をからだ中へ滿ち渡らせてくれる  
のだ。それは『我』を忘れる恍惚の状態ではなくて、  
『我』の生存を祝福するやうな緊張の状態なのだ。

早曉の壯觀は四季を通じてひとしく見得るところの  
自然の美である、しかし、冬の朝の持つ特殊の靜寂さ  
が一段と早曉の壯觀を神秘化するところのあるも否々  
難い、私は凜烈たる寒氣の骨にまで徹する冬の朝、或  
ひは庭を歩みつゝ、あるひは田圃の畦道を歩みつゝ朝  
日ののぼるのを望み見て頓に心身の淨化さるゝを感ず  
るものである。そして田圃に住んでゐる身の幸福を感  
謝するものである。

# むだがき

今村 鞆

らぬ。

〔BB〕

△黄金は人性を腐蝕する強酸であるが故に、金ネ庫の中には、人生は鼠や公債と共に住ひ得ぬ、書物は人性の胃を損なふ、智識の石塊ろであるから、人生はブックから、紙魚の如くに這ひ出しては來ぬ。

れずに、人間の眞を冷靜に客觀し得た人でなければならぬ、また環境の變つた時、時勢の遷つた時に、古きものを未練氣もなく、弊履の如く捨て、新らしく、よりよきものを、創造し得る人でなければならぬ。

△人間に對し、人間以上の事を要求してはならぬ、夫れは偶ま、飛魚が海面上に飛翔したからと云ふて、凡ての魚に、空を飛べと云ふ様なものである、人間にはまた、人間以下の事を要求してはならぬ、夫れは雁や鴨が、水を潜るからとて、總ての鳥に水底を這へと、云ふ様なものだ、人間には、唯其本來の性に隨ひ、人間丈の事のみ要求すべきである。

△神様でも、晝寝をしたり、怒つて洪水を捲へ、人を殺したり、嫉妬心を燃したりする、一方には獸や鳥や虫が、人間の様に口をきく……と云ふ神話や物語りには、無限の味がある。

△人生を豊富にしろ、と云ふ事は、貯金を奨励する事でも無ければ、學問を勧める事でも無い、人間の尊とさを知つて、何物にも押へられずに、自己の魂を力強くせよ、人間の本然に活きよ、全的に存在せよ、と云ふ事ではなければならぬ。

△大昔しに、暴力で萬事を解決

△金持と云ふ人達は、人生と云ふ事そのものをも、贅澤であると考へて居る人である、權力者と云ふ人々は、人生其ものが、自己に都合の悪いもので、何時でも自己に都合のよい人生に、變へ得るものと信じて居る人であるから、此等の人々が、或機會に眞の人生にぶつ付かつた時、人以上の驚愕と狼狽がある。

△人間は容易に本音を鳴かぬものである、唯怒つた時悲しき時、戀した時、金の欲しい時などに、少しく本音を鳴くのみである、此點が鶯や駒鳥が常に本音を鳴くのと、違つて居るが、強ひて人間を鳥に例ふれば、九官鳥のよふなもので、其嘘を吐く事の巧拙によつて宿打付けらるゝ。

△個々の人間に、價值付けると云ふ事は、甚しき無謀の妄斷である、本來人間に價のあり得べきもので無い、人の作つた人の評判などや、其人の仕事表面的經歷などは、本來の人に、何等の輕重を加へるもので無い、歴史上の偉い人になるよりは、平凡に生きて尊い無名の人になる方が、人間として意義ある存在である。

△『人生の目的』誰れが考へ出した言葉か知らぬが、萬人を一律に迎らせねばならぬ、左様なもの

は有り得べきで無い、假りに神が人間を造つたとしても、最初先づ人生の目的と云ふものを定めて置いて、而る後にアダマイブを造つたものでもなければ、又人間自身としても、胎内に在る中に、己れの目的を定めてから、呱呱の聲を揚げたものでも無い、からである、若しも人生に目的がありとすれば、夫れは各自銘々か、人生の途中で勝手に捲へたものであり、何時でも變更の出來得るものであり、各々人により、違つたものであり得べきである。

△『概念的に抽象せられたる人生の目的』夫れに似寄つた、色々ものを考へ出し、編み出し、萬人の足に一律に履かせて見ても、足に合ふ者もあり、合はぬ者もあるから、理想と現實が離ればなれになつて、歩調が亂れるのは、初めから判り切つた事である。

△人の集團生活に於ては、便宜上、前に云ふた様なものを捲へる事が必要である事は、否定は出來ないが、併し夫れ等を、捲へたり考へたりする人は、餘程徹底的に人間と云ふもの、人生と云ふものを知り抜いて居て、何物にも提は

した時代には、いやでも應でも、其の力を認めざるを得なかつたか

人が出來て來た……夫れは強ひて一同の者に、青い眼鏡をかけさ

建直しをすべき、價値の再評價をすべき、其時期が來たのではな

した時代には、いやでも應でも、其の力を認めざるを得なかつたら、其の力に評價付けられた、今日でも人の社會上の或る力を認めて値打付けて居るのは、古昔暴力時代の遺風餘習だと、斯ふ云ふ風に觀察すれば、意味があつて無い様なものになる。

△從順にあれ、何事も疑ふなど云ふ事は、虚偽に満足せよ、自然の本心を縮めよと云ふ事であり、一個の人生を持つる者には、望まれ得ない事である。

△人間として、爲すべき當然の務めである……せられて居る、平凡な事柄を實行せしめんが爲めに、不斷の努力が、必要でありとすれば、其事が、當然でも平凡でも無い事を、物語つて居るものがある。

△赤ひ眼鏡をかけて、物を見る

人が出来て来た、……夫れは強ひて一同の者に、青い眼鏡をかけるせて、物を見せて置いた事から由來したのである、初めから、眼鏡などを與へずに、物を正しく視せるに慣らして置けば、ドンナ眼鏡が這入つて來ても、遠かには必要はない。

△壁を吾が思ふ方角に、這はせん事の不能なる如くに、人間の心は中々人の自由にならぬものである、人を御する者は、最初から全部を、觀山の僧徒と思ふべきである。

△經驗のみには少しも價値が無い、經驗の價値は其經驗の途中の觀察にある、特に正しき人生的觀察にある、此區別を混同して經驗のみに價値付けると、老人でありさへすれば、盲目でもヨイ／＼でも貴とくなり得る。

△根源に立歸つて、總ての物の

建直しをすべき、價値の再評價をすべき、其時期が來たのではなからるか。

◇しろく帖

平田久雄

○ 金剛山電氣の常務山内さん、將棋好きで有名である。多忙な人が、一たびさし始めると『まあもう一番く』で、客はとう／＼一日を、丸ツブシにされることがある。で、要件のあるものは、盤の出ない中、早く話を切出すに限るといふものがある。

○ 鈴木高商校長、ほんとかからだ、が弱いやうだ。尤も寝てゐても、ぢーつとしてゐるやうな人ではない。句案三昧、どうしても一日に十句くらゐは作るといふ。なほらないワケだ。

○ 漢銀の浅井さん、本を読むことは感心だ。客があつても、なくても十一時頃までは起きてゐて、ひつそりと書見をやつてゐる。この頃淑明女學校の整理問題で、毎日同校に通つてゐるが、むしろ校長さんになつたらよからうといふものがある。

○ 渡邊晋博士のやうに、規律正しい生活をやつてる人も珍らしい。朝は正九時には、チャンと病院に出てる。約束したことは、決して違はない人だ。本誌の原稿などは、遠慮して二三日も取りに行かぬと『どうしたんだ、十八日といふ約束なのに……』ア、ペコペコ一本打ち込まれる仕合だ。

閑 居

東 京 玉 井 小 次 郎

埒もなき豚のいびきや梅の花  
梅咲くや隱居の障子開け放つ  
紅梅や筑波を軒に寮の客  
白梅や物干竿の心なき  
三尺の窓に影あり梅の鉢  
梅咲くやのどかに拂ふ麴の塵  
胸に詩の蟬りあり臥龍梅  
不足なき心となりて梅の花  
鉢の木に瓢を叩けば梅薫る  
梅か香に驚鷲の遠音かな  
紅梅や白羽二重に織り込まむ  
ドライブのわだちゆるめて梅の里  
梅が香や五十三次汽車の窓  
紅梅に灯すや京は加茂の寮  
ほのぼのと夜空に梅の花白し

# 猩紅熱

中村健太郎

【四六】

つた。

×

越へて三日、意外にも私は光化門の電車に於て、友人鶴田兄から中原晋作氏の令嬢が、またこの悪魔のために奪はれたことを聞いた。中原氏は、商銀の調査課長、私とは十數年來の知己で、赤坊時代からよく知つてゐる令嬢、中原家に取つては、花の中の花、實の中の實、これが一朝にして奪ひ去られたのだ。御心中をお察しせずには置かれやうか、松本さんも、中原さんも、今頃はお坊ちゃんお嬢ちゃんの一舉一動が、あり／＼と目について忘れやうとしても忘れられず、泣いて泣いてせめてもの慰安を求めてゐらるゝことであらう。

×

朝鮮では、猩紅熱のことを陽毒發斑と稱してゐる。時には随分流行することもあるやうだが、朝鮮の人の話によると、その割合に死亡率は多くないといふことである。随つて餘り恐れてゐない。あの赤痢を吾々が恐がつてゐる割合に、朝鮮の人は餘り恐れぬのと同一心理であらう。然しその治療の方法に至りては、全然異つてゐる。

この病氣には、外氣が一番悪いといふので、先づ窓の隙を堅く閉して患者をその中に置く。そして熱があるだけに發散せしめねばならぬといふので、部屋を適度に温めて發汗劑を用ゐる。度々發汗をする間に熱がとれる。かくて一週間もすれば、全身の皮がとれて全治するといふのである。

×

往年猩紅熱の流行時に、内地人の開業醫で、名國手の名を博した人が京城にゐた。この國手の手に掛りさへすれば大丈夫といふまで

私が朝鮮に来て、猩紅熱の話を聞いたのは、確かに記憶しないが、明治三十六七年頃であつたかと思ふ。工學士の某氏が、數日の間に斃れた、その時の噂には、眞赤に體が焼けてゐたと傳へられた。續いて間もなく高等官某氏が、僅か二日の間に斃れた。これには誰一人として戦慄しないものはなかつた。

×

それから猩紅熱は、殆んど毎年のやうに、我が京城を襲ふやうになつた。そして大人よりも家庭の實ともいふべき少女少女を奪ひ去るやうになつた。各家庭の脅威は加はり、子を持つ親の尤も大なる心配の一つは、猩紅熱であることになつた。猩紅熱！私は名を聞いただけでも慄つとする。

×

回顧すれば、大正二年の秋も半の頃であつた。人は紅葉狩よ、栗拾ひよと、秋の野趣に興を遣る時私の家庭に取りては、天にも地にも換へ難い一人の愛兒を、この悪魔のために奪はれた。發熱はしたが、子供のごとく案外に平氣なので、初は感冒ぐらゐに考へてゐたが、顔のあたりが眞赤になつて様子が見え異つて來るので、醫師の診斷を乞ふたら、これは猩紅熱だとの宣言。私は只だもう百斤の

×

初めて嘗めた人生の悲慘事、その時のことばかりは、今にも忘れることが出来ない。人生にこれ程の悲慘事もあるまいと思つた。何としても慰めることが出来ない。思ふまいとすれば、亡き兒のありし時のことが、益々思ひ出さるゝばかり、どうしても之を消す事が出来ない。諸處方々から随分同情のお言葉もいただいた。然し何としても私共の心を慰むることは出来ない。私共は、只だ泣いて泣いて泣き暮した。私が佛門に入つたのも、これが何よりの動機であつた。

鐵槌でなぐり付けられた感じがした。猶豫なく總督府醫院に入院させたが、掌中の珠は、終に奪はれて仕舞つた。

×

初めて嘗めた人生の悲慘事、その時のことばかりは、今にも忘れることが出来ない。人生にこれ程の悲慘事もあるまいと思つた。何としても慰めることが出来ない。思ふまいとすれば、亡き兒のありし時のことが、益々思ひ出さるゝばかり、どうしても之を消す事が出来ない。諸處方々から随分同情のお言葉もいただいた。然し何としても私共の心を慰むることは出来ない。私共は、只だ泣いて泣いて泣き暮した。私が佛門に入つたのも、これが何よりの動機であつた。

×

前の時實京畿道知事が、福岡市長に御榮轉の發表があつたので、道友の人達が、妙心寺別院に打集いて、心ばかりの送別會を催した時、出席される筈の松本京畿道内務部長のお顔が見へないで、不審に思つてみると、誰からともなくその令息が猩紅熱のために入院されたためであることが判つた。これを聞いて驚いたのは、私獨りではなかつたらうが、別けて私には猩紅熱と聞いて、驚き且つ慄いだ深刻な體驗をもつ私には、松本さんに御同情申上げずには居れな

に一般から信頼されたものだ。惜

# 青山谷中

東京にて 高橋章之助

三月十五日は故大木伯爵三十日祭に相當す、茲に於て予は目黒の同邸に伺候し禮拜の後御夫人に追悼の意を表して辭去、直ちに青山墓地に參詣す。

恭々しく伯爵の靈域に類づきたる後、序ながら諸名士及諸先輩の墓標を禮拜したるに、何れも清掃して自から崇敬の念を起さしむ。時に同行の一人曰く、市街整理の爲め移轉の問題ありと。予茲に於ていへらく、斯の地域は帝國の靈地にして國家守護の重鎮なれば斷じて移動すべからず、何れの墓地も斯の如く清淨に整頓せるは各子孫及緣故者が先人の功績を追慕し、小にしては一身一家の爲め大にしては國家公益の爲め邁進勇往すべき決心は斯の靈地に參詣する毎に勃興し、遂に一團となりて國家を守護す。余も亦此處に來りて更に愛國心を増長したるの感あり、誠に欣快に堪へず云々と。

谷中の瑞輪寺は予の兩親埋葬の墓所なり、上京の都度第一に參詣す。予の墓地に隣接して松平家の墓所あり、碑石高大一見して大名華族の威風を追想せしむ。然るに大震災の際破壊崩落したる儘にして今尙ほ修復せず、昨甘青山墓地清掃の好感に引換へて極めて悪感を誘致せり、貫主市川大僧正に面談の際松平家當主に急速回復の勸告を爲すべく注意せり。苟くも人として祖先の墳墓の荒廢を其儘に拋棄すれば子孫の衰頹必然なりとす。予先年滿洲視察の際奉天西塔の靈域内に支那人の大便所あるを見て亡國の兆此處に發露せるを慨嘆したることありき。予等常に忠孝を論じ、思想の善導を講す。松平家墳墓の頹廢を見て看過するを得ず、敢て茲に一言を戒告す。

に一般から信頼されたものだ。惜しい哉、この人は不幸にして數年前に病没したが、この國手の猩紅熱に對する治療法は、朝鮮のそれと大同小異であつたことを後で傳聞した。

X

朝鮮は、今は昔と異つて、醫界の權威者が雲の如く集つてゐる。そして半島の衛生保健の基礎を立て、偉大なる功績が擧げられてゐる。然かもこの猩紅熱のみ獨り依然として暴威を振ふとは何事であらう乎。一日も一刻も速くこの惡魔を退治して戴きたい。

## ◆人さま〜

吉田 莊 一

◎森殖銀理事、時實前知事を送るとして、微唱していへらく『美し稻の美し雪にたひりもて美し男になりし君はや』

◎山縣佛三郎氏、旅行を以て晩年の樂みにしてゐる。先生の應接を訪ふと、日本横濱の繪ハガキから上海、香港、シンガポールと、世界一週順に整然とブックを整理してある。

◎衣笠病院長、正月から鐵鉦鈴を始め、朝眼が覺めると、令息を引つ張り出し、オイツチ、ニツチ、爲めに昨年調製の洋服が『胸がせまくなつて君、弱つたよ』

◎中村健太郎氏、客と談笑しつゝ平氣で譯文を内地文に譯す、『よくソナナ藝當が出来ますね』といふと『ナニニこれも習慣です』おそろしい習慣があつたものだ……

◎仁川の大平嘉重郎氏、米と理屈と兩刀で立つ、しかも學校時代は驚く勿れ應用化學の生徒！。

# 越中禪

(上)

奉天にて 廣江澤次郎

## 舊式の禪

私が大坂の某會社を經營して居る時代に上海出張所を支店に昇格し大いに積極的活躍せんと同僚を促して上海に出馬した、大阪に殘留幹部連は私共一行三名を招待し北陽隨一の歡樂郷平鹿にて送別の盛宴を張つて呉れた、一ト風呂浴び晝間の汗と煤煙と塵を洗ひ落し、浴衣がけで二階の大廣間に陣取り痛飲した、お酌は北陽の粒選り名妓揃ひ、酒は灘の生一本にして芳醇無比、燗はどんがんの上々吉、酒宴半ば酔拂つた〇と云ふ仲居が私の前にヤオラ御輿を揃へたかと思ふと、奇聲を張り揚げ滿坐の中で私の體カラを罵罵轟轟！。

「廣江はん！あんた随分舊式の方だんなあ、今頃六尺禪しめとる人があつまつかいな、大抵越中か猿股だつせ、此眞夏に大切さうに六尺禪……オホホ々々々、もう少しハイカラにおなりやあす」

此不意打に私は妙からず狼狽した、私はアノヘラ々々の猿股や外れ易い越中が大嫌ひぢや體カラは俺の素質じやと反駁したが、此抗議も眞向微塵、即時却下！どうせ口の悪い海千山千の女に懸つちや敗北と無條件沈黙し熱いやつを一杯グウツと飲干して苦笑。

平鹿の送別宴も早や十年前の昔話だ、舊態依然六尺禪は忠實に私に附隨しとる。會社は上海活羅奏功遂に五十萬金を投じて分工場設置、成績も優良又本社も増資決行し積極的經營したが

他の同業會社と合併して基礎愈々強固となり私は本來の使命に立戻るべく引退し滿洲進出に方針一轉した。

## 沼の滿洲

私は大正六年より十一年迄五年間他の方面に忙しく滿洲に來る機會はなかつた、然るに現漢城銀行事務の堤永市さんが朝鮮銀行奉天支店長として活動して居られし時代私に從憑して曰「金も大いに貸出す！積極的援助もするから是非滿洲に進出せよ」

又當時鮮銀本店に居られし掛井理事も歎じて曰「どうも滿洲は遣り惜い處だ！、困つたものだ、滿洲夫れ自體が駄目なのか夫れとも人間代へたらよいか、新進氣鋭の君一つ出懸けて遣つて見て呉れ！」

朝鮮銀行と積極援助に就ての打合せも濟み大正十一年の秋から出動した、京城の三井物産會社支店と聯絡を執り奉天の某煙草工場に忠州産米國種葉良十萬圓餘を小手調べに賣込んだ、幸先よしと私は大いに働き相當成績も良好！其當時私の常宿は大和ホテルであつた、風采の揚らぬ瘠癯長身の私が西洋人と支那人相手の國際商賣をするのにホテル生活や貧乏な借家住みは困ると理屈を附け事務所建築を計劃した、鮮銀も賛成東拓も援助快諾！其時分滿洲救済資金として朝鮮銀行、東洋拓殖會社、正隆銀行等に合計一億圓が、極度に行詰り早敷狀態の滿洲に流入の新聞記事が盛んで前景氣は上々吉であつた私の建築案も規模擴大三層樓の事務所と純西洋人向の貸家五軒と倉庫一棟！場所は商埠地と新市街の境で京城で云ふならば鍾路の角と云ふ様な處を滿鐵より三百坪頂戴仕り建築を急いだ、滿洲の建築費は京城や東京邊に比較せば五六割安だが私のは鳥渡五萬圓を要する、決心したら最後迄猛進するのが私の癖！工事はドン々々進んだ、然るに未だ上棟式もやらぬ九月一日突如關東地方大震災の悲電が飛んで來た、滿蒙の

# 東京街頭小觀

東京 堀一知郎

處は飛鳥山前、時は午過ぎ。

小僧らしい者が、蜜柑を盛つた籠を肩に置きながら自轉車で走つて來た。

と、そゝくさ錢湯の横丁から出て來た半ズボン男が、大道を横切らんとする時、あなやと思ふ間もなく衝突してつた。

尤も此衝突は、すれ違ひ損ねた程度だつたので、小僧は自轉車から投げ出されたものゝ、片手で身を支へる事が出來た。けれど蜜柑は路上に散亂した。

『貴様は交通新規則を知らねえナ』  
半ズボンは、外套の損所の有無を驗しながら吐鳴つたが、小僧は立て續けに二つ三つビョコリ〜と叩頭しながら謝罪つた。そして路上の蜜柑を二つ三つ拾つて、

『罰金です』  
と云ひながら両手で捧げた。

半ズボンは、事の意外に慥つたい顔をして、四邊を見廻はしたが他に誰も見て居るものは無かつたので、薄笑ひを私に向けながら、蜜柑を受取つた。  
私はあまりの他愛なさにブツと吹き出すと、小僧も私の顔を見て笑ひ、半ズボンもカラ〜と笑つた。

天地愁雲に鎖され財界は極度の緊縮を餘儀なくなせられた、祖國の官民は東都復興に全力を注ぎ滿洲三界迄顧る邊なく例の滿洲救済の一億圓も越中權？。

## 進退兩難

關東地方の大震災は私にも多大の衝動であつた、建築工事を止めんか資金を如何せん？工事を斷然中止するも餘りに意氣地なき限り！左顧右眄に日を送らんか寒威の襲來を如何せん！進退之れ谷まつたが私は大勇猛心喚發遮二無二其工事を督勵し竣工を急いだ、漸く十二月末に浪速通四十五番地街路を距て、大倉組と相對し堂々たる新築家屋は落成した、私は筆の序に東省實業會社と東洋拓殖會社奉天支店の好意を感謝して置く、此混亂中の大努力は私の精力を多く消耗し運轉資金も涸渇し始めた、震災後の財界は特に極度の警戒である、而も平生權門に媚びず富貴に阿らず獨力獨行通り通して來た私には有産無産階級の頭目連にベコ々々頭を下げた金満家の妻君を瞞して大金を穿き出す様な藝當は鯨鯨立しても出來ない。運命の神は更に私を譏弄した、折角苦心して開拓せしトラスト系の某大會社は他に合併され購買權は上海に移動し又他の煙草工場は未だ恩離たるを免れず、其後の主なる商賣としては鳳凰城産の米國種葉良約十萬圓買収と第二次率直戰に際しては關貢米十四萬圓程一舉に賣込んだ位の事だ、而も利益は多く支那人に吸はれてこれまた越權。

左なきだに沼の如き滿洲！東都大震災と數次の支那動亂で益々落潮を辿つた東三省！骨を刺す如き湖北の寒風吹荒む大陸曠野の眞只中なる潭陽の私の事務所静かに私は考へさせられた、然るに茲へ又も特製大型の越中權か舞込んだ、此越中こそは西比利亞に於て入念に撮影の秘藏の泊來フィルムなるが特に來月號で公開する、觀覽料はゴ二人二圓！雜筆社へ前納の事呵々。

# 一句二字不可加減

清谷 惠 眼

〔五〇〕

根底は、唐朝の善導大師に起因したのであります。

其善導大師は自分の著書に向つて、一句一字加減す可らず、寫さざと欲するものは一に經法の如くせよと、釋迦何人ぞ吾何人ぞの禪宗の見識には及ばぬ様であるけれども、佛の説いた重法の如くせよと言ふ見識は他力教の極體である。所謂自力教の見識と同一である。

然し善導は左釋言ふ中にも歸王寶偈を作りて其著教文義の初に『先勸大衆發願歸之寶、道俗時衆等、各發無上心、生死甚難厭、佛法復難欣、共發金剛志、橫超斷四流、願入彌陀昇歸依合掌禮、世尊我一心、歸命盡十方、法性眞如海、報化等譯佛、一一菩薩身、眷屬等無量莊嚴及變化、十地三賢海、時劫滿未滿、智行圓未圓、正使盡未盡、習氣亡未亡、功用無功用、證知未證知、妙覺及等覺、正愛金剛心、相應一念後、果德涅槃者』と自己を非常に謙遜して歸命すと言ふてある。一方では佛の如く自分の著書を佛の重典の如くせよと言ひ乍ら、又一面には佛教に依つて安心立命して絶待他力の信仰者には尊敬し恭敬すると言はれた。茲が佛教の面白い所である、所謂自信教人信で、自分の信する所は他の人にも勧めたい、亦夫れと同時に己れの欲せざる事を人に施す勿れで自分にいやと思ふことは決して勧めない。私も京城雜筆愛讀者の一人として、多少でも佛教を研究して見様といふ志のある方は、佛教は矛盾したことを言ふ様で決して矛盾して居ない。所謂平等即差別差別即平等で、雁の足の短いのも鶴の足の長いのも平等で即差別であります。この文章も或は一句一字不可加減かも知れません。阿々

松本さん此様な見出しを附けるとあなたは筆もとれん癖に、えらいけんしき。禪宗坊主ならいざしらず、眞宗坊主としては、ちと見識がえらすぎると、叱らるゝかも知れんが、そこは將棋氣分で充分私の腹を御承知故。晩食の一杯機嫌で、一氣呵成に筆とりました。然し悪い所は遠慮なく直してください。標題と矛盾のことを言ふ様であるが、それが佛教の面白い所です。

大體此の文句は、支那の佛教文化旺盛時代の、唐朝の善導大師の散善義といふ書物の末尾の『願使含靈聞之生信、有識觀者西歸、以此功德回施衆生、悉發菩提心慈心相向、佛眼相看、菩提眷屬作眞善知識、同歸淨國共成佛道、此義已請證定竟、一句一字不可加減欲寫者一如經法應知』此の文句を根據としたのであります。所謂事典據にあつからざれば君子の恥づる所です。此様なことを書くと、現代の青年文士からかびくさいと笑はれますが、夫れは百も承知で温故知新氣分であります。

大體平民佛教の先驅たる祖聖親鸞が、七百年前僧侶といふものは表面上禁欲主義の時代に、肉も食

ひ女房も持ち、阿彌陀佛を絶待的に信する一念にて佛になると教へた。南無阿彌陀佛の六字を唱ふれば、釋迦は觀無量壽經に八十億劫の生死の罪を除くと説いた。夫れを親鸞は百尺竿頭一步を進めて、一口の念佛を唱へずとも信する一念に佛になると、一生涯を通じて力説したが、夫れが今日の日本佛教全體にて寺院布教所七萬七千一ヶ所の内、眞宗の寺院布教所は二萬一千八百七ヶ所。殆んど三分ノ一を有して居るので、又日本佛教全體の教師の數は、七萬五千八百七十二人の内眞宗の教師數は二萬四千二百八十三人。是れ亦殆んど三分の一あります、尙日本佛教信徒の數は全國民數七千六百九十八萬八千三百七十九人の内、四千八百四十萬二千四十三人で、半數以上は佛教信徒である。其の佛教信徒中一千三百三十五萬六千七百二十六人、殆んど是れ亦三分の一は親鸞の教化を蒙る信徒であります。其祖聖親鸞が、釋迦の眞意を正しく闡明したのが、今の一句一字不可加減の發言者、善導大師であるとして、其著教行信證の中の正信偈といふ、讀佛の詩集に『善導明佛正意、於長定散與逆惡、光明名號顯因緣、開入本願大智海』云々と讃仰したのであります。

日本大乘佛教平民佛教の發達の

形容出来ない。

旅行記で見ると、支那は坤もきかないところらしいが、久しく美



露か、七百年前僧侶といふものは表面上禁欲主義の時代に、肉も食

日本大乘佛教平民佛教の發達の

字不可加減かも知れませぬ。呵々

# 鳶

## 永樂町人

○  
ほがらかな高空で、鳶のゆるく廻つてゐるのを見ると、何となく羨ましく思はれる。

○  
下界の人間は、暗い部屋の中で終日執務したり、ちまたに行く時でも、そくそくと、マルデ物に追はれてゐるやうだ。

○  
集團の中でも、家庭の中でも、暗い内証がある。排擠がある。迎もアノ鳶のやうに、晴れ／＼と、天下を我物顔に、行かないではないか。

○  
田螺が、魚屋の荷の中にあつた何となく心を曳かれるのである。故里や田螺鳴く夜をなつかしむ田螺といふ動物は、田の泥の中に隠んでゐる。鳶とは反對に、暗いところ、光のないところが、彼の世界なんだ。

○  
それ故、彼のどす黒い、みにくい姿を見ると、彼れの世界観は、どんなに暗惨なものだらうかと思はれる。

○  
但しこれは、コツチのあて推量だ。私は、若し出来るものなら、田螺の人生觀を聞きたいと思ふ。

○  
湯にはいることが好きだ。湯の中で、ぢつと、物を考へる樂みは、何ともいへないものがある。

○  
無念無想で、うつとりと、湯につかつてゐるのは、更にいゝ氣色だ。  
湯あかりの氣持が、また何とも

形容出来ない。

○  
昔から天下を取つたものは多い私は、問うて見たい。天下を取つた時と、湯あかりの氣持とは、どつちがホントウにいゝのだと。

○  
少年の折、私の宅が修理中で、しばらく庭に掘風呂したことがある。

○  
春のなかばで、雪、湯が立っている。  
春光地にあまねく、樹々は紅白の花をつけてゐる。湯につかつてみると、櫻などがほろ／＼と落ちて来る。

○  
雲雀は、遠くで鳴き、蝶蛾は、花をもとめて右往左舞する。  
私は、これまで、この時ほどゆつくりと、しんみりと、春を味はつた時はないと思ふ。

○  
いつか一度、庭に掘風呂したいと思つてゐる。  
春雨や蓬をのぼす草の道といふ句を讀むと、うまれた田舎のことが思はれる。

○  
二里の道を、小學校に行つたものである。  
春が來ると、遠山が紫にかすみ道々では、鳥がのどかに歌ひ、田の畔に臥す巨牛さへ、うつとりと春に酔つてゐるやうだ。

○  
グイ／＼伸びる草の力。  
自然のたくみは、部屋の中で、本を讀むものには――若しくは、年に一二度の花見をするものには迎もわからぬのである。

○  
千里鶯啼綠映紅、水村山郭酒旗風、南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中（江南道中春望）  
この詩を讀むと、支那に行つて見たくなる。

○  
旅行記で見ると、支那は迎もきたないところらしいが、久しく漢詩にひたつた身には、何んでもその境を、實地に踏んで見たく思ふ。

○  
詩句の力は、つよい。  
私は、この詩を讀むと、奈良近郊、京都近在は、マルデ比較にならぬやうにさへ思ふ。

○  
古い書物で、花見遊山の記事を見ると、古人の幸福がうらやましい。

○  
人間の社會は、だん／＼その社會内の仕事がつつかしく、その社會内で生きるといふことが至難で顧みて四圍の、太陽や、星辰や、樹木や、山川にしたしむゆとりはない。

○  
恰も魚屋の桶の中で、終日、からだからだとを、からみ合ひ、ねぶくり合つてゐる鰻と同一だ。彼等の世界観は、だん／＼鰻の外皮のやうに、暗惨にならないでドウする？。

### ◆胸のすく話

平・田久雄

早川堂看板店の主人、大阪朝日に堂々何百圓とかの廣告をする。そしてその曰くに『内地の大新聞にでつかい廣告をしたところで、それだけキ、メがあらうとは思ひません、ただ氣持です、とこかスーッとした胸かすきまずからネ』、名物男だけに、いふことが面白い。俠氣に富んだ先生で、頼まれるとイヤといへず、金銭などは、何とも思つてゐないから珍らしい。▲モト／＼洋書が本論で、その方では一家を成してゐる、立派なウデ前ただのペンキさんとは人が違ふ。

紫織女史

別府八百吉

▲發病三日、入院三日で日日の婦人記者神女史は長逝した、四月四日の午後五時半、春にそむいて彼女は不歸の客となつた。

▲人生朝露の如しといふがまことに脆いものである、神女史の新聞生活は大正十年一月京日社に入り、十三年に退社、同年九月日日の人となり主として校正に當つてゐた。

▲筆の人としての神女史の天分と教養とは特に記する程のものになかつたが、頗る精勵格勤で、努め／＼と猶ほ足らぬを慮れるといふ風だつた、餘り丈夫でないのに殆んど休んだ事がない、仕事に忠實の婦人と曰ひ得る。

▲二十八歳といふのにまだ獨身だつた、美人とは曰へぬがバツとした姿容のもちゆいで流行語でいふとモトダンウトマンとでも評し

てよかつたらうか、ドコか人を惹きつける所があつた、然も志操固く色々浮いたうわさを立つるものもあつたが十中の八九は面白半分の好い加減の想像のやうだつた。

▲女史には結婚の申込みも可なりあつたらしい、又戀の對照者としても少なからず異性からねらわれたらしい、これらに對して女史は氣位が高くて應じないと云ふ所もあつたらうが、その家庭的負擔と委任とが今日までオールドミツスたらしめたと思はれる。

▲その父は夙に逝き、二兄は家を忘れてゐたといふ、そこで君は老母に仕へ弟妹の面倒を見、一家の柱石として生活の切り盛りをした、其間女として少なからぬ苦勞のあつた事は察するにたたくない▲然も悪性の病魔は君の命を奪つた、机を並べてゐた吾々はその死の餘りに意外に早かつた事が信ぜられぬ位である、新聞人としての神君よりも春秋に富み、責任感の強い、又色々の意味に於て心残りの多かつたであらう君を悼む。

雜筆と寄稿

- 一、原稿は毎月十日締切ります。
- 一、しかし成るべく五日頃までに頂いた方が好都合です。
- 一、出来るなら一頁以内にお書き下さい。
- 一、御名前を出すことの出来ぬ原稿は、お載せいたし兼ねます。
- 一、お願ひした時は、どうか努めて御執筆下さい。
- 一、お願せずとも、お心づきのことはどうかお書き下さい。
- 一、雜筆は事實上寄稿家及び讀者の共有物であります。

(五二)

編輯後記

一 記者

◎福岡の市長さん『お別れの辭を送らず。矢鍋さんから』時を送る』が来る。今度は一言なかるべからずだらう。

◎工藤さん『へそ禮讚』に、五六行書き添へたいといふ『イカン』、輪廓付で、もうちゃんときマツてゐる、書きたくば續へそ禮讚でも書きなさい』といふと『夢つたナア……』トウ／＼續を書くことになる。

◎高久さん、澁々ながら、トウ／＼百行……。但し長唄でないのが残念……。

細工の御用は  
徳力へ  
電本三九三九  
地金/御用  
京城明治町  
徳力本店出張所  
電本二〇七八

大正十五年四月廿八日印刷  
大正十五年五月一日發行  
一部定價金四十五錢  
京城府和泉町一六四  
發行兼 松本 武正  
編輯人 石川 利夫  
印刷所 京城日報社  
京城府和泉町一六四  
發行所 京城雜筆社  
電話光化門三〇六



鈴木木商店

京 城 支 店

# 樂器と蓄音器

獨乙高級ピアノ  
 山葉ピアノ、オルガン  
 鈴木製  
 ヴァイオリン、マンドリン  
 獨乙製  
 ウァイオリン、マンドリン  
 内外管樂器一切  
 内外蓄音器  
 内外レコード (日蓄、日東、  
内外ウイナナー)  
 内外音樂書  
 樂器附屬品一切  
 運動具一式

(目錄無料進呈)

京 城 本 町 二 丁 二 九 十 九

## 釘本洋樂器店

電 長 一 二 八 三 番

金剛煎餅金剛山  
金剛羹金剛饅頭

金剛山產松實松花應菓

# 金剛飴

龜屋商店

京二城本町

電話二七  
番局四七五

金剛柏子  
(松の實 妙り)  
金剛おこし  
金剛柏子菓  
(朝の實 餅菓子)  
金剛しるこ

# 均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して居ります故に消化が宜しく風味の佳良と獣臭のない事は一度召上った方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位でありますから値段の競争をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用

陸軍衛戍病院御用

京城府内各病院御用

## 平山牧場

電話光化門一三三番  
京城東小門外

◎銘仙と

毛糸◎

秩  
参  
入  
ぬ  
也

堀内満輔

電話本局  
八五五  
九〇〇  
〇六五  
番番番

◎多少に拘らず御用命  
の程を願ひ上げます

野に山に遊ぶべき日は来りぬ

サツポロビール

エビスビール

アサヒビール

ほのかなる酔心地を知り玉へ

# 朝鮮鐵道株式會社

| 營業線 |        |
|-----|--------|
| 忠北線 | 二九哩〇   |
| 慶北線 | 二二、七   |
| 慶南線 | 三七、二   |
| 慶東線 | 二六、九   |
| 慶西線 | 四三、五   |
| 慶南線 | 二二、八   |
| 慶東線 | 一三、六   |
| 慶西線 | 一七、七   |
| 慶南線 | 二八、七、八 |

**連帶線**

總督府鐵道局 朝鮮郵船株式會社  
 大阪商船株式會社 忠北線、全南線、慶北線  
 澤山汽船商會 慶東線、慶南線、黃海線  
 以上各沿道自動車部トノ連絡アリ

**新羅古蹟**

慶州ハ京釜線大邱驛乘換ヘ約三時間ニテ達ス  
 新羅二千年ノ王都ニシテ遺跡多シ  
 吐含山石窟庵ノ石像ハ世界無比ノ稱アリ 東洋文化ヲ語ラントセバ須ク一遊ノ要アリ

**晉州名勝**

慶南線晉州ハ南鮮ノ一都邑ニシテ文錄ノ役ニ於ケル古戰場ナリ  
 南江、江岸ニ直石樓アリ結構雄大眺望絶佳、附近ニ名勝古蹟少ナカラズ

**信川溫泉**

信川溫泉ハ京義線沙里院驛ニテ乘換ヘ約二時間ニテ達ス  
 溫度攝氏五十五度、無色透明、アルカリ性ナリ  
 驛ヨリ溫泉迄約三丁、來往最モ便利ナル溫泉地ナリ。局線主要驛ヨリ社線各驛ヨリ賃金二割引